

昭和初期における大岡忠相顕彰運動の展開

—阪谷芳郎氏旧蔵資料紹介を兼ねて—

資料課 椿田 有希子

はじめに

神奈川県茅ヶ崎市堤の浄土宗寺院、窓月山浄見寺は大岡家の菩提寺である。大岡家は江戸時代の幕臣だが、なかでも江戸時代中期、享保改革で八代将軍徳川吉宗の片腕として長らく町奉行をつとめ、のち寺社奉行に昇進し一万石の大名として三河国西大平藩(愛知県岡崎市)を立藩した大岡越前守忠相の名がつとに知られている。

では、いったいなぜ、その大岡家の墓所が堤にあるのか。それは大岡家が相模国高座郡堤村(茅ヶ崎市)と同郡下大曲村(寒川町)を治めていた縁による。大岡氏は三河出身の大岡忠政が堤村に380石、下大曲村に220石の知行地を有したのが始まりである。そして忠政の三男忠世が下大曲村の知行を得て分家したのが、忠相につながる大岡家であり、忠相は忠世から数えて三代目にあたる。そうした関係で、大岡本家の知行地であった堤村に墓所が設けられたのである⁽¹⁾。

ところで、その浄見寺の境内には一基の記念碑が現存する。昭和5(1930)年に建てられた「贈四位大岡忠相公廟宇塋域修築記念碑」と、その裏面「大岡忠相公頌徳碑」である。前者の篆額は浜口内閣において司法大臣をつとめた渡辺千冬、撰文は大審院長牧野菊之助による。いっぽう後者の篆額は時の内閣総理大臣浜口雄幸、撰文は神奈川県愛甲郡宮ヶ瀬村の出身で紋章学の権威、沼田頼輔による。そして両者とも、撰文の揮毫は萩園村(茅ヶ崎市)出身の元衆議院議員山宮藤吉(山宮については第二章第一節で後述)の手になるものである⁽²⁾。つまりこの顔ぶれは、当時の中央政財界・法曹界、そして地域の名士が揃い踏みでこの大岡忠相顕彰運動(以下、顕彰運動もしくは運動と略)に関与したことを象徴しているのである。そこで本論では、建碑にまでこぎつけた経緯や動向、運動の特徴や主体等を明らかにしたい。

近代以降における大岡忠相顕彰については、大口勇次郎氏の研究⁽³⁾によってその概要を知ることができる。ただ、大口氏の分析は大正元(1912)年11月の従四位追贈と、

その後開始された贈位祭(大岡祭)が中心であり、本論で取り上げる昭和期の建碑運動の背景やその詳細については言及が少ない。それはおそらく資料的限界に起因するものと思われる。しかしその後、茅ヶ崎市から『山宮藤吉日記』⁽⁴⁾が刊行され、さらに近年、神奈川県立公文書館(以下、当館と略)において関連資料(阪谷芳郎氏旧蔵資料、後述)が新たに整理・公開された。これらを合わせて分析することにより、昭和期の運動についても実態解明が可能である。そこで本論では、当館収蔵資料の紹介も兼ね、阪谷芳郎旧蔵資料全25点の翻刻を掲載する。加えて、『横浜貿易新報』が報じた建碑関係記事の翻刻も、参考資料として掲載したい。近現代における偉人顕彰に関しては近年、研究の進展がみられるが⁽⁵⁾、こうした研究動向に本論がいささかなりとも資すれば幸いである。

1. 阪谷芳郎と顕彰運動

1.1. 阪谷芳郎氏旧蔵資料について

まずは、本論で紹介する「阪谷芳郎氏旧蔵資料」について、その概要を述べておきたい。

平成30(2018)年、当館の書庫から未整理の資料群が「発見」された。当館では古文書の資料台帳整備が残念ながら十分になされておらず、どのような経緯で当館が所蔵するに至ったのか、いつ購入したのか⁽⁶⁾等々、来歴は不詳である。ただ、内容としては、大岡家瑩域復興計画発起人のひとり山宮藤吉から阪谷芳郎に宛てた、事業の進捗状況を知らせる書簡類が中心である。そうした点を勘案し、明治～大正期の法曹家・政治家阪谷芳郎旧蔵資料の一部が市場に流出したものと目途をつけた。そのうえで「阪谷芳郎氏旧蔵資料」と命名し、整理・公開作業を実施した。令和3(2021)年3月現在、25点全てについて、当館ホームページの「収蔵資料検索」で詳細情報検索・画像閲覧が可能である。

なお、阪谷芳郎の資料は、当館以外にも東京大学社会科学研究所、国立国会図書館憲政資料室にも収蔵されているが、当館収蔵資料との関連については現時点では不明とせざるを得ない。この点については後考を期したい。

1.2. 阪谷芳郎について

では、その阪谷芳郎とは、いったいどのような人物だったのか。『阪谷芳郎東京市長日記』⁽⁷⁾に収録されている本人による履歴書(「男爵阪谷芳郎略歴」)や、櫻井良樹氏の解題によって彼の略歴を簡潔に確認しておこう。

阪谷芳郎は文久3(1863)年生まれ、備中国川上郡九名村(岡山県井原市)出身である。父親は江戸時代後期から明治期の儒学者として知られ、岡山の郷学興譲館の督学もつとめた阪谷素(朗蘆)である。若き日に漢学および英語を学び、明治17(1884)年に東京帝国大学文学部を卒業した。なお、明治32年には法学博士号を授与されている。

大学卒業後、大蔵省に入省。かたわら、専修学校、海軍主計学校、慶應義塾大学にて経済・財政学の教鞭をとった。明治21年には、渋沢栄一次女琴子と結婚。この婚姻により、渋沢家経由で数多くの経営者や銀行家との人脈を有することとなった。

明治39年1月、第一次西園寺公望内閣において大蔵大臣となり、明治41年1月までその地位にあった。その間、明治40年9月、男爵に叙任されている(のち子爵に陞爵)。その後、明治45年7月から大正4(1915)年まで東京市長、さらに大正6年1月から昭和16(1941)年まで、5期にわたり貴族院議員をつとめた。大正13年2月には専修大学学長、昭和3年5月には各界名士の社交場である日本倶楽部の副会長に就任している。そのほか、史蹟名勝天然記念物保存協会副会長に就任するなど、政財界・法曹界・国際関係の要職や名誉職を軒並み歴任している。その多彩な経歴は、「百会長」と称されるほどであった。

では、そうした彼が、いったいなぜ山宮藤吉を介して顕彰運動の発起人に請われたのだろうか。それは、彼の多彩な人脈が期待されたからに違いない。そのいっぽうで、阪谷自身の記した履歴書には、この運動に関して一言の言及もない。山宮の熱意とはうらはらに、阪谷にとってみれば、おそらくは数ある頼まれ仕事のひとつに過ぎなかったであろう。

2. 顕彰運動の経緯

2.1. 当初の動向

先述したとおり、阪谷芳郎はあくまでも途中から顕彰運動に担ぎ出されたにすぎな

い。もともと、この運動は地元、とりわけ山宮藤吉を中心に動き出したものであった。山宮は文久2(1862)年、相模国高座郡萩園村(茅ヶ崎市)生まれの政治家であり、昭和8(1933)年に没した。鶴嶺村長、神奈川県会議員を歴任したのち、明治45(1912)年から断続的に衆議院議員をつとめ、昭和3年に中央政界を引退した後も様々な形で政治に関与した人物である。そのかたわら、明治31年からは平塚江陽銀行の経営に参画、さらに明治43年には萩園報徳社を結成するなど、明治後期から昭和初年にかけて、神奈川県内においていわば地域の名望家として知られた存在であった⁽⁸⁾。そこで本章では、山宮藤吉自身による日記にも依りつつ、運動の発端から時系列で追っていくこととしよう。表1は、『山宮藤吉日記』から関連記事を抜粋したものである(適宜、送り仮名等を補った)。

表1 『山宮藤吉日記』にみえる顕彰運動の推移

No.	年(西暦)	月	日	事 項
1	大正15年 (1926)	1	12	大岡越前墓地修理の件について、吉田太右衛門方にて浄見寺住職 菱科氏と面会
2			21	夜、菱科顕順が来宿、泊り
3			22	菱科氏同伴にて大岡忠綱を訪問するも不在のため家令に面会
4		6	19	高木益太郎氏同伴にて江木司法大臣と面会、大岡廟復興の賛成を求める
5			23	高木益太郎同行にて小山検事総長・横田大審院長と面会、大岡廟復興について賛成を求める
6			24	菱科顕順同行にて高木益太郎・毛利文賢氏を訪問、大岡廟復興の件を協議、大岡育造氏を訪問
7		7	6	菱科顕順と共に本銀町高木益太郎事務所において毛利文賢氏と面会、大岡廟の事について協議。この日菱科氏より毛利氏に100円預け、蔵原惟郭を訪問
8			8	堤浄見寺大岡墓詣
9			16	(憲政会)本部に小泉又次郎を訪問、高木益太郎氏に早朝面会、大岡寄附事務を当方に引き取る
10			19	浦賀東林寺に菱科顕順を訪問、先刻吉田政司を訪問、寄付許可願の調印を求める
11			20	大岡寄付募集許可証願のため(神奈川)県庁に出頭、小柳内務部長に面会するも書類不備のため果せず
12			22	大岡寄付帳その他準備
13			23	菱科氏と自動車同乗にて小泉又次郎・大岡育造・元田肇等を訪問、発起人の調印を求める。大岡忠綱を訪問後、後藤新平を訪問し寄付帳の題詞を求める

No.	年(西暦)	月	日	事項
14			24	横山勝太郎を訪問、署名を求める、さらに同氏の紹介状を以て花井・原・仁井田三博士を訪問するも、いずれも不在
15			28	菱科氏同行で芝浄土宗務所を訪問、野村盛之氏と面会、寄付金許可書類作成を依頼する、大岡子爵邸を訪問
16			29	大岡子爵家を訪問し長岡金一郎氏と面会、大岡夫人が来る1日 <small>(神戸カ)</small> 神戸へ出張のため寄付帳を託す、伊東長次郎氏の初筆記入のため
17		8	19	芝公園浄土宗務所 <small>(山宮)</small> において菱科氏と会見、浄見寺復興寄付募集願書を整理、余これを預る
18			25	神奈川県庁教務課長と面会、大岡寄付許可申請書を差出す。大審院長横田秀雄氏を訪問、大岡寄付の賛成を求め承諾を得る
19			26	岡田良平・浜口雄幸・花井卓蔵・仁井田益太郎諸氏を歴訪するも、いずれも不在
20			27	早朝、岡田良平氏を自宅に訪問、大岡寄付賛助員を求め承諾を得る。浜口雄幸氏を訪問、同断、文部省宗教局長と面会し寄付許可の件を申し入れる
21			31	午後、大岡子爵を訪問
22		9	4	菱科氏と面会、揮毫頒布の件の承諾を得る。今日暴風雨のため運動は見合せ、菱科氏はそのまま帰る
23			5	夜、梅沢重信が来訪。揮毫頒布依頼宣伝書200通を渡す
24			6	藤沢警察署長庄司長作氏を訪問、大岡廟寄付金ならびに揮毫配布の件を申し入れる
25			9	河野永雄が来訪。揮毫宣言書および見本300枚を渡す
26			18	菱科顕順が来宿、寄付金許可願の件
27			29	窪田文挙が午後來訪、揮毫頒布の件を承諾、見本およびピラを追って届ける事を約束
28		10	2	上京、昌平方にて揮毫準備のため泊り
29			4	一日揮毫
30			6	三橋福次郎を介し、揮毫20枚の届方を島田外作に依頼、昌平方に揮毫60枚を発送
31			14	大審院長横田秀雄氏を訪問、(横田が)揮毫を受け取る
32			17	午後6時、三橋福次郎方にて川口芳太郎と面会、揮毫頒布を頼む
33		12	7	一日揮毫
			8	上京、大岡邸にて菱科氏と待合せ、連れ立って徳川公爵邸に行き入江寛一郎と面会
34			9	菱科氏同行にて徳川公爵邸において入江寛一郎と面会、大岡寄附を申し入れるも拒絶される。阪谷芳郎邸を訪問、差支えあり面会せず。大岡邸を訪問
35			11	菱科氏同伴にて阪谷芳郎氏を訪問、大岡寄付について相談、山田一郎に紹介状を頼む
36			15	牛込原町に山田三郎氏を訪問、菱科氏同行、山田氏は3、4日多忙のため後日の面会を約束して帰る

昭和初期における大岡忠相顕彰運動の展開

No.	年(西暦)	月	日	事 項
37			23	山田三良博士を訪問、大岡の件について各所へ紹介状を依頼
38			24	原嘉道博士を訪問し大岡の件の賛成を求める。花井卓蔵氏を訪問するも不在
39	昭和2年 (1927)	3	10	菱科顕順氏同伴で平沼騏一郎・久保田静太郎その他を訪問、大岡廟復興の件
40			12	倉富金三郎氏を訪問、大岡廟復興の賛成を求め承諾を得る
41			18	末延道成氏へ調印を求める、大岡廟復興について
42		4	6	菱科氏同道にて山田三郎氏を訪問、大岡復興の件を相談
43		7	8	浦賀東林寺に菱科氏を訪問(※この時期、山宮は樺太歴訪のため不在)
44			9	午後4時、菱科氏と共に沼上伊之助・米山迂学・小山房全諸氏を訪問(※同上)
45			10	菱科同道にて井上八重吉氏を訪問、同氏同行にて橋本氏ならびに渡部薫氏を訪問、横浜弁護士の方は渡部氏が引き受ける 午後、菱科氏と上京、岸事務所に馬越政平氏を訪問、それより丸ビル内弁護士数名を訪問(※同上)
46			11	菱科同道で弁護士、すなわち丸ビル・海上ビル・中通を巡回し、寄付を募集(※同上)
47		9	1	大岡廟再興について山田三郎・阪谷芳郎両氏を歴訪。花井卓蔵氏を訪問するも不在
48			3	横田秀雄を訪問。花井卓蔵を訪問するも不在、司法大臣を訪問、控訴院長・横浜裁判所長を訪問するもいずれも不在
49			4	富谷銈太郎を訪問
50			5	花井卓蔵・山田三郎を訪問。鳩山一郎・岡崎正也を訪問するも不在
51			7	鳩山一郎・和仁貞吉を訪問、署名を求める
52			8	菱科顕順が午後2時に来訪
53			11	大岡復興協議会を来26日午後6時より麴町区有楽町一丁目日本倶楽部にて開会のため、招待状を作製、38通
54		10	27	岸清一氏を訪問、大岡廟復興計画を頼む。来29日午後5時日本倶楽部にて実行委員会を開く事に決し寄付帳を預ける
55			29	日本倶楽部にて大岡廟復興実行委員会。岸清一・阪谷芳郎・富谷銈太郎・山宮藤吉・菱科顕順
56		11	8	日本倶楽部において松井茂氏と面会、大岡廟復興の事を相談
57			14	警視庁において向山庄太郎氏と面会、一龍齋貞山・寺島幸三・坂東英造等の紹介を求める
58			15	神田典山・桃川如燕の調印を求める
59			19	寺島幸三を訪問するも不在のため、代理の牧野氏と面会し大岡廟の事を頼む。俳優協会庶務主任小浦氏と面会し、中村歌右衛門他11名の賛成を求める。21日までに通知するとの事。一龍齋貞山・錦城齋伯山の調印を求める
60			20	菱科氏が昌平方に来訪

No.	年(西暦)	月	日	事 項
61			24	岸清一氏を訪問、阪谷芳郎氏を訪問、渋沢事務所を訪問。藤田謙一氏を訪問するも不在
62		12	1	日本倶楽部にて大岡復興発起人会
63			16	午前、大岡廟に行く。午後1時40分茅ヶ崎駅下車、阪谷芳郎・横山鎌太郎・藤井某・森富太・岡崎久次郎・松井茂諸氏が大岡廟に参詣
64	昭和3年 (1928)	1	14	上京、菱科氏と共に岸清一氏を訪問
65		5	11	日本倶楽部において大岡廟復興発起人会。来会者 岸清一・阪谷芳郎・富谷銚太郎・泉二清熊・青山典山・山宮藤吉・菱科顕順。席上、岸氏が来月洋行のため委員長を辞退につき横田秀雄氏を推薦
66			12	菱科氏と共に明治大学に横田秀雄氏を訪問、委員長就任の承諾を求める
67			18	11時半東京行。昌平方に泊り、大岡廟の事を相談する
68		7	4	横田秀雄氏を明治大学に訪問
69			10	菱科氏同道にて井上八重吉を訪問、同氏同行にて橋本氏ならびに渡辺薫氏を訪問、横浜弁護士の方は渡辺氏が引き受ける 午後、菱科氏と上京、岸事務所に馬越政平氏を訪問。それより丸ビル内弁護士数名を訪問
70			11	菱科氏同道にて丸ビル・海上ビル・中通の各弁護士を巡回し寄付募集
71			16	山本格三を訪問、大岡寄付100円を受け取る
72		8	19	高田畊安を訪問、大岡越前寄付金200円を受領
73			31	小山氏(小山房全)より大岡寄付金100円を受領
74		9	4	菱科顕順同行、茅ヶ崎方面において大岡復興費寄付運動
75			8	上京、横田秀雄氏を明治大学に訪問、大坂石黒行平氏への添簡を受け取る
76			9	石黒行平氏へ都合紹介状 <small>(照会カ)</small> 發送
77			17	横田秀雄氏を鎌倉別荘に訪問。20日明治大学にて面会の事を約束する
78			20	上京、横田秀雄氏を訪問
79		10	5	上京、明治大学に横田秀雄氏を訪問。関西行を報告、近県弁護士会長に紹介状を依頼
80			14	大岡復興寄付募集のため森信次郎・小橋一太・南弘を訪問
81			26	上京、菱科氏と共に横田秀雄・岸清一・大岡子爵を訪問
82		11	3	大岡復興について各弁護士会長に依頼状を發送
83			7	上京、菱科氏と同行にて大岡子爵を訪問、寄附金3,000円を要求
84		12	1	菱科氏同行で大岡忠綱氏を訪問、3,000円の承諾を得る
85			2	大岡復興発起人会につき、明年早々の開催を横田・岸・阪谷・山田・高木・山崎諸氏に発信

昭和初期における大岡忠相顕彰運動の展開

No.	年(西暦)	月	日	事 項
86			12	菱科顕順同行にて伊藤円蔵・伊藤吉五郎・伊藤包文・大井写真店・皆川弘毅・五島恵一・真田喜三郎・内田法全を訪問
87	昭和4年 (1929)	1	12	上京、菱科氏同行にて岸清一・横田秀雄氏を訪問。阪谷芳郎・沼田頼輔・牧野菊之助諸氏は不在。相模鉄道株式会社長岩南俊二氏を訪問
88			13	岸清一・横田秀雄・阪谷芳郎三氏の承諾を得て、来る19日午後5時日本倶楽部にて大岡廟復興事件実行委員会を開催する旨の通知状を発送
89			19	午後5時、日本倶楽部にて大岡廟復興発起実行委員会開催。出席 阪谷芳郎・横田秀雄・山宮藤吉・(山宮)昌平・菱科顕順
90			26	横田秀雄氏を訪問(明治大学)、大岡廟復興寄付募集について実行委員署名書状発送の承諾を受ける
91		2	5	阪谷男爵を日本倶楽部に訪問、各所への紹介名刺を受領
92			6	滞京、大岡運動
93			7	滞京、大岡運動
94			8	滞京、大岡運動
95			18	大岡運動
96			20	大岡運動、滞京
97			21	滞京、大岡運動
98			22	滞京、大岡運動
99			23	滞京、大岡運動、沼田頼輔を訪問、大岡伝記編集の件
100			25	滞京、大岡運動を昌平に託すための準備行為
101			28	大岡墓詣、吉田政司が小出村役場において助役および校長と面会。来10日小学校にて沼田氏講演会の開催を評決
102		3	1	江陽銀行茅ヶ崎支店に行き大岡寄付金を預ける 来10日小出村小学校で開かれる沼田氏の講演会につき、案内状107通発送を依頼する
103			4	沼田頼輔氏を訪問、大岡伝編集の材料を提供
104			8	午後3時、日本倶楽部にて横田秀雄・岸清一・山宮藤吉と会合、運動方針協議
105			10	小出小学校において沼田頼輔の大岡越前事蹟講演
106			20	昌平方にて大岡寄付金依頼状20通書く
107			21	阪谷芳郎を訪問し渋沢男爵の大岡寄付金を依頼。沼田頼輔を訪問、大岡伝出版の件
108		4	25	上京、沼田頼輔を訪問、大岡伝出版の件
109		5	28	江陽銀行茅ヶ崎支店より大岡預金600円引出 上京、午後9時沼田頼輔を訪問し三木退三と面会、大岡伝800部受領を約束する
110			29	明治書院訪問、大岡伝400部を受取り代金300円を支払う この内 横田秀雄 10 山崎捨吉 20 大岡忠綱 10 山宮藤吉 110 岸清一 110 山宮昌平 220
111			30	(尾) 沼田頼輔同伴にて小佐竹猛氏を訪問 沼田氏に100円寄付金受領、さらに220円を渡す

No.	年(西暦)	月	日	事 項
112			31	宮代平蔵を訪問するも不在、大岡伝および抵書3枚を贈与
113		6	5	大岡忠重・高木益太郎・小泉又次郎を訪問するも、いずれも不在
114			6	午後7時半東京発、9時茅ヶ崎下車、江陽銀行支店にて菱科頭順と待合せ、11時に至るも来ず
115			7	菱科頭順・石川重郎へ発信
116		7	3	岸清一氏を訪問、大岡発起人寄付金決定の通知の件
117			7	多田抱天方にて菱科頭順・吉田太右衛門両氏と会見、大岡廟について
118			17	昌平より招電あり、上京、大岡復興事業について
119			18	消防組各組頭へ阪谷・横田・岸等の名を以て依頼状を発送
120			23	警視庁にて丸山総監と面会、大岡廟復興賛成の署名を求める
121			30	堤浄見寺にて菱科・吉田・森山・池杉・山宮と会合
122		8	25	伊沢吉五郎同行にて茅ヶ崎別荘を巡廻、大岡寄付金の件
123			26	茅ヶ崎別荘君塚・牧野・原・梅村・小島・小橋・美濃部・菊池・伴田・高羽等、寄付金募集の巡回、伊沢吉五郎が同行
124			30	小出に行き、浄見寺および吉田政司・広瀬善治を訪問
125		9	6	浄見寺にて大岡協議会、菱科氏不来につき延期、15日
126			13	横田秀雄氏を明治大学に訪問
127			15	小出浄見寺にて大岡復興準備会、出席 菱科・森山・広瀬・山宮
128			17	横田秀雄を訪問、来25日大岡実行委員会開会の事を決す
129			25	日本倶楽部にて大岡復興実行委員会、来会者阪谷芳郎・横田秀雄・岸清一・富谷銚太郎・広瀬善治・菱科頭順・山宮藤吉
130			26	昌平方にて姫田組平野某と面会、大岡廟復興建築請負の件を相談、設計画を貸し渡す
131		10	12	阪谷芳郎氏を訪問、碑文起稿の件を依頼 平島の設計を待つも出来ず
132			13	浄見寺訪問、菱科・吉田両氏に面会、工事請負の件、昌平に電報にて平島の設計は中止、菱科氏の設計書を郵送
133			16	阪谷男爵より大岡碑文の原稿到着
134			18	平島保年の浄見寺設計計画書を待つも、不完全のため再考を求める
135			23	大岡廟請負、東京側不調
136			24	大審院長を訪問するも不在のため山崎書記官と面会、大岡越前碑文起稿の事を依頼
137		11	16	小出村小学校にて小橋文相教化講演、小橋氏大岡墓参
138			18	大岡寄付金決算報告につき県庁に行く
139		12	13	大審院に牧野院長を訪問、大岡復興記念碑文稿を預る
140	昭和5年 (1930)	3	18	^(尾) 沼田頼輔同行にて小佐竹猛氏を訪問、大岡越前贈位申請の件、神奈川県庁に大森定禅氏を訪問、同伴について相談
141			19	大岡越前寄付金募集の件で浄見寺において吉田政司他2人と面会、調印を求める

昭和初期における大岡忠相顕彰運動の展開

No.	年(西暦)	月	日	事 項
142			20	浦賀町東林寺に住職 菱科顕順氏を訪問、大岡寄付金報告書調印を求め県庁教務課へ出頭、報告書を提出
143		4	8	大岡碑草稿書
144			9	大岡碑草稿書
145			10	大岡碑草稿書
146			11	総理大臣官邸に戸田秘書官面会、大岡碑篆額の件
147			13	大岡碑書
148			14	大岡碑書
149			20	大岡廟上棟式
150			25	大岡碑揮毫
151			28	上京、大審院長と面会、記念碑篆額を司法大臣に頼む
152			30	岸清一氏を訪問、明治大学に横田氏を訪問するも不在
153		5	1	横田秀雄氏を明治学院に交え面会 大審院書記長山崎捨吉氏を訪問、来8日寄付金収納の分引渡し の約束
154			3	発起人諸君へ11通寄付督促状を発送、大岡越前復興の件
155			8	上京、大審院へ参庁するも山崎書記長不在
156			9	大審院書記長山崎捨吉氏と面会、大岡寄付金2,824円90銭受領、 帰途江陽銀行支店へ預入れ
157			14	大岡碑揮毫
158			17	大岡碑文張付について富田石工方へ行く
159			25	岡崎久次郎を訪問、大岡碑の篆額浜口氏揮毫の依頼を為す
160			29	大岡墓参
161			30	岡崎久次郎氏より、大岡碑浜口首相篆額承諾の件通知
162			31	岸清一氏より大岡寄付金収入調書到着
163		6	5	令文武を来訪、大岡寄付金岸氏取扱の内620円の小切手を受け 取る
164			10	岸清一を訪問し令文武と面会、会計の事
165			14	大岡寄付の件で横浜へ行く、杉山謙造不在、戸井氏と面会
166			19	横浜へ行き杉山謙造・戸井嘉作を訪問、大岡寄付の件
167			21	杉山謙三・小野重行を訪問、大岡寄付募集の件
168			25	大岡寄付の件で原富太郎を訪問、来28日再訪を約束する
169			26	大岡碑および西村太吉墓碑揮毫
170		7	25	小出村浄見寺へ行く、建碑地位の件
171			26	駿河銀行より2,700円引出し、うち大岡分として2,400円を江陽 茅ヶ崎支店へ預ける
172		9	1	浄見寺を訪問し吉田政司と面会、石工富田茂司への不足金支払 いの事を頼む
173		10	3	大岡寄付払込について鳩山・倉富・平沼・浜田・床次・元田・栗原・ 山岡・小久保・宮田・平塚等に発信 (伎脱) 昌平、歌舞座にて梶川支配人と面会、大岡廟ならびに記念碑写 真飾付についての交渉、不調

No.	年(西暦)	月	日	事項
174			5	(伎脱) 岸清一氏を訪問、歌舞座興行中天一坊に関する、大岡越前守を扮する市川左団次の大岡墓参請求の件について 来る8日発起人会日本倶楽部にて開会につき、明日中精算の要あり、菱科・吉田の兩人に電報打つ
175			6	浄見寺へ行き、会計統一のため菱科・吉田両氏と面会
176			8	正午12時、日本倶楽部にて発起人会。参会者 阪谷芳郎・富谷銚太郎・岸清一・山宮藤吉・菱科顕順5人
177			15	床次竹二郎を訪問、金20円寄付を受ける。町田農相を訪問するも要領を得ず、俳優協会にて小浦氏と面会するも寄付拒絶、青山幽山を訪問するも病氣、一龍齋貞山を訪問するも不在
178			16	東京より浄見寺回り
179			17	浄見寺へ行き、多田抱天頼む
180			18	浄見寺にて明日の準備出張、多田抱天出張
181			19	大岡復興除幕式および入仏式挙行。午前11時半より大岡子爵家族4人・長岡金一郎・阪谷男爵・岸清一・大審院長牧野菊之助・控訴院長和仁貞吉・検事長三木猪太郎・横浜地方裁判所長宇野氏・沼田頼輔・岡崎久次郎・その他東京消防組50名出席。終て午後4時より余興として芝居執行
182			21	浄見寺へ行く
183			23	浄見寺訪問のうえ上京
184			24	大岡廟寄付者に絵葉書および記念碑写真220通発送
185		11	15	上京、岸清一を訪問、大岡記念碑拓本表装3幅、各弁護士茶掛として岸氏へ渡す
186			24	小野重行より大岡寄付金50円を受取る
187		12	3	菱科顕順・吉田政司および予3人同行にて岸清一・阪谷芳郎を訪問し面会、大岡復興の謝礼。なお横田秀雄・山田三郎・富谷銚太郎を歴訪するもいずれも不在
188			16	神奈川知事と面会、小塩八郎右衛門氏への紹介状を頼む
189			19	上京途の次、横浜杉山謙造・小塩八郎右衛門を訪問するも2人とも不在
190			27	菱科顕順・吉田政司が来訪、大岡復興費精算の件
191			29	横浜へ行き小塩八郎右衛門より金50円大岡寄付費貰い、駿河銀行200円引出し、さらに広瀬善治に200円利入
192	昭和6年 (1931)	3	16	夕、会計士東某を頼み、大岡決算調べ
193			17	大岡決算
194			18	午前10時、岸清一事務所にて遠藤庸次郎と面会、大岡決算書を渡し検査を求める
195			24	岸清一氏を訪問、大岡決算および和田篤子訴訟の件
196			28	岸清一氏を訪問、大岡復興決算済書類を受取る
197			29	小泉又次郎氏に大岡復興寄付金払込照会状を差出す

【典拠】茅ヶ崎市史資料集第六集『山宮藤吉日記(下)』(茅ヶ崎市 平成24年)

そもそも浄見寺の堂宇および大岡家廟の再興が必要となったのは、大正12(1923)年9月の関東大震災により大破したためである。その後いつ頃から再興の動きが生じたのかは定かではないが、『山宮藤吉日記』における関連記事の初出が大正15年1月12日(表1 No. 1)であることを鑑みるに、遅くとも大正14年末頃までには浄見寺住職菱科顕順が山宮に接触をはかっていたのではないかと推察される。

当初、山宮はどうやら、もっぱら彼一人を中心に運動を展開しようとしたらしい。この年の6月から10月にかけて彼は、司法大臣・検事総長・大審院長など法曹界の重鎮(表1 No. 4・5)大岡育造や小泉又次郎、元田肇、横山勝太郎、花井卓蔵、そして浜口雄幸等々の政治家(表1 No. 6・9・13・14・19)ら旧知の人々、そして彼らに紹介を乞うた人物らから賛同の署名を得るべく精力的に動き回った。それと同時に彼は、大岡家の末裔である子爵大岡忠綱の同意も得て、自らの人脈を利用した寄附金集めにも乗り出している(表1 No. 9～13・15～18・20)。それは寄附のかわりに自らの揮毫を贈呈するという形だったようであるが(表1 No. 22～25・27～32。ちなみに彼は、書家としても知られた存在であった)、おそらくは頓挫したのであろう、この年以降揮毫と引き換えに寄附を募った形跡はない。そればかりか、徳川公爵家に協力を求めたものの拒絶されるという憂き目にもあっている(表1 No. 33・34)。もはやこの段階に至ると、いち地域名望家の手にあまる運動になりつつあったのであろう。そこで「百会長」とも呼ばれ、各界に人脈を有する阪谷芳郎に助力を乞うたのである。

山宮と阪谷の初接触は、日記で確認できる限りにおいては大正15年12月11日である(表1 No. 35)。この日山宮は、菱科顕順を同行して阪谷を訪問し、「大岡寄付に付相談」している。阪谷自身の覚書(資料24)にも「大岡越前守墓所保存 十五年十二月十一日面会ス」とあるので、二人の面会はこの日が初めてだったとみてよいだろう。そして、昭和2年9月1日には正式に阪谷が「発起人中ニ加名ヲ承諾」している(資料24)。

山宮は阪谷の影響に頼るところ大であった。そのことは、昭和2年9月26日開催の発起人会⁽⁹⁾に欠席を表明した阪谷に対し山宮が、「本件に付てハ閣下を唯一の援護者と頼み居候」(資料2)と翻意を懇願していることや、運動に際し阪谷の名刺を利用している(表1 No. 91)ことなどからも端的に窺い知ることができる。付言すれば、昭和2年11月24日には山宮と渋沢栄一との面会が実現し(資料24、表1 No. 61)、さらに

は発起人の一人として「大岡忠相公塋域復興計画趣意書」に洪沢の名を借りることを得たのも(資料4・5、表2)、ひとえに洪沢の娘婿たる阪谷の助力あればこそであった。

表2 大岡忠相廟宇復興発起人一覧

名 前 (資料の並び順に従った)	発足時 合参加者 ※1		「大岡忠相公塋域復興計画趣意書」発起人			属 性	爵 位	略 歴
	呼掛人	招待者	※2	※3	※4			
いとう ちょうじろう 伊藤 長次郎	○		○	○	○			不明
いけだ ひろし 池田 宏		○	○	○	○	官僚		大正 - 昭和時代前期の官僚。内務省社会局長、東京市助役、社会局長官などをへて、大正13年京都府知事。大正15年9月神奈川県知事に就任(昭和4年7月依願免本官)。東京市政調査会理事などもつとめた。
いわた ちゅうぞう 岩田 宙造		○	○	○	○	法曹・政治		明治 - 昭和時代の弁護士、政治家。東京日日新聞記者をへて明治35年弁護士となる。昭和6年貴族院議員。敗戦直後の東久邇・幣原両内閣の法相をつとめた。28年日本弁護士連合會会長。
いぬい まさひこ 乾 政彦		○	○	○	○	法曹		大正 - 昭和時代の弁護士。大正4年弁護士を開業。11年から東京弁護士会会長を4度つとめ、昭和8年弁護士を裁判官に登用する法曹一元化を提唱した。21年貴族院議員。
いちりゅうさい ていざん 一龍齋 貞山			○	○	○	芸能		明治 - 昭和時代前期の講談師。4代・5代の門弟で、明治40年6代を襲名。「義士伝」などが名人芸といわれ、ラジオの普及とともに全国に知られた。晩年は講談組合頭取と落語協会会長をかねた。本名は榊井長四郎。前名は昇竜齋貞丈(3代)。
井上 八重吉			○	○	○			不明。
いけだ とらじろう 池田 寅二郎			○		○	法曹		明治 - 昭和時代前期の司法官。明治36年司法省にはいり、東京地裁の判事、検事などをつとめ、大正10年民事局長。昭和7年大審院検事となり、11年大審院長。
もとじ しんぐま 泉二 新熊			○		○	法曹		明治 - 昭和時代前期の司法官。大審院判事、司法省行刑局長などをへて昭和11年検事総長、14年大審院長。客観主義の刑法学者として実務・学説に影響力をもった。枢密顧問官。

昭和初期における大岡忠相顕彰運動の展開

名前 (資料の並び順に従った)	発足時 合参加者 ※1	会 招 待 者	「大岡忠相公塋 域復興計画趣 意書」発起人			属 性	爵 位	略 歴
	呼 掛 け 人		※2	※3	※4			
はない たくぞう 花井 卓蔵	○	○	○	○	○	政治・ 法曹		明治－昭和時代前期の弁護士、政治家。刑事事件や人権事件の弁護士として大逆事件などを手がけた。明治31年衆議院議員(当選7回)。衆議院副議長をつとめる。のち貴族院議員。刑法改正、陪審法制定などにつくした。東京弁護士会会長。
はまぐち おさち 浜口 雄幸		○	○	○	○	政治		大正－昭和時代前期の政治家。大蔵省から政界に転じ、大正2年立憲同志会に入党、4年衆議院議員(当選6回)。蔵相、内相をへて、昭和2年民政党の総裁となり、4年首相。緊縮政策と金解禁を断行したが、ロンドン海軍軍縮条約調印が統帥権干犯として野党や軍部に攻撃された。5年11月14日東京駅で狙撃され、6年8月26日死去。
はとやま いちろう 鳩山 一郎	○		○	○	○	政治		大正－昭和時代の政治家。大正4年政友会から衆議院議員に当選し、犬養・斎藤両内閣の文相。戦後、日本自由党を結成し総裁となる。昭和29年日本民主党を結成。3次にわたり組閣し、日ソ国交回復を実現した。
はまだ くにまつ 浜田 国松			○		○	政治		明治－昭和時代前期の政治家。弁護士をへて明治37年衆議院議員(当選12回、政友会)。昭和9年衆議院議長。12年本会議で軍部の政治介入を批判し、広田内閣を総辞職においこんだ。
原田 繁蔵			○	○	○			不明
にしくぼ ひろみち 西久保 弘道			○	○	○	官僚		明治－昭和時代前期の官僚。内務省にはいり、福島県知事、北海道庁長官、警視總監などを歴任した。大正5年貴族院議員。15年東京市長。
にいだ ますたろう 仁井田 益太郎		○	○	○	○	法曹		明治－昭和時代前期の法学者。ドイツ・イギリスに留学後、京都帝大、東京帝大の教授を歴任。民事訴訟制度を確立。昭和9年貴族院議員。
にった のぶ 新田 信			○	○	○	地元		大正・昭和期の茅ヶ崎町長。大正10年町長に就任、昭和7年まで務める。昭和3年県町村長会会長・全国町村会理事。
ほづみ しげとお 穂積 重遠	○		○	○	○	法曹	男爵	明治－昭和時代の民法学者。大正5年東京帝大の教授となり、民法講座などを担当。家族法学の基礎をきずく。貴族院議員、最高裁判事。

名前 (資料の並び順に従った)	発足時参加者※1	「大岡忠相公塋域復興計画意書」発起人	公塋復興計画意書発起人			属性	爵位	略歴
	呼掛け人	招待者	※2	※3	※4			
星野 欽治			○	○	○			不明
とこなみ たけじろう 床次 竹二郎			○	○	○	官僚・政治		明治 - 昭和時代前期の官僚、政治家。内務次官、鉄道院総裁などをへて、大正3年政友会から衆議院議員(当選8回)となり、原・高橋両内閣の内相。13年政友本党総裁。民政党顧問をへて昭和4年政友会に復帰するが、9年党議に反し岡田内閣に入閣したため除名された。
富谷 銈太郎	○		○	○		○(実行委員) 法曹		大審院判事、大審院長、最高裁判所判事。
おおおか いくぞう 大岡 育造			○	○		○(故人) 政治		明治 - 昭和時代前期の政治家。明治23年第1回の衆議院議員(当選13回)。33年政友会に参加。東京市会議長、衆議院議長、第1次山本内閣の文相。昭和3年1月26日死去。
おおはし しんたろう 大橋 新太郎			○	○	○	実業		明治 - 昭和時代前期の実業家。明治20年、博文館を設立。日本有数の出版社とする。35年衆議院議員。のち貴族院議員。
おかだ りょうへい 岡田 良平			○	○	○	官僚・政治		明治 - 昭和時代前期の官僚、政治家。文部総務長官などをつとめ、明治40年京都帝大総長。大正5年寺内内閣の文相となり、高等教育制度の改革をおこなった。加藤高明内閣・第1次若槻内閣でも文相をつとめた。貴族院議員、枢密顧問官。
岡崎 正也			○	○	○			不明
こやま まつきち 小山 松吉			○	○	○	法曹		明治 - 昭和時代前期の司法官、政治家。大審院検事などをへて大正13年検事総長。昭和7年斎藤内閣の法相。9年法大総長。貴族院議員。
おかざき きゅうじろう 岡崎 久次郎			○	○	○	政治		明治・大正・昭和前期の実業家・政治家。茅ヶ崎町在住。相模鉄道初代社長。明治45年から通算6期衆議院議員を務めた。
わかお いくたろう 若尾 幾太郎			○	○	○	実業		大正・昭和期の実業家。大正5年横浜連合青年会頭をはじめ衆議院議員、横浜商工会議所議員などの公職を歴任した。

昭和初期における大岡忠相顕彰運動の展開

名前 (資料の並び順に従った)	発足時 ※1	会 参加者	「大岡忠相公塋 域復興計画 意書」発起人			属 性	爵 位	略 歴
	呼 掛人	招 待者	※2	※3	※4			
わに ていきち 和仁 貞吉			○	○	○	法曹		明治－昭和時代前期の司法官。明治29年判事、のち検事に転じ長崎・大阪・東京の控訴院検事長をつとめる。大正13年判事にもどり、東京控訴院長、大審院長となる。
川村 植太郎			○	○	○			不明
かねこ かくのすけ 金子 角之助			○	○	○	地元		明治時代の自由民権運動家。明治18年、大阪事件にくわわり軽懲役2年の刑をうける。45年神奈川県藤沢町長となり、のち全国町村長会を組織して会長となった。
かんだ はくざん 神田 伯山			○	○	○	芸能		明治－昭和時代前期の講談師。2代神田伯山(初代神田松鯉)に入門し、小伯山をへて明治37年3代伯山を襲名。
よこた ひでお 横田 秀雄	○		○	○	○(実行委員)	法曹		明治－昭和時代前期の司法官、法学者。大審院判事をへて、大正12年大審院長となる。13年明治大学学長。
吉田 政司			○	○	○	地元		小出村収入役
よこやま かつたろう 横山 勝太郎		○	○	○	○	法曹・政治		明治－昭和時代前期の弁護士、政治家。山口地方裁判所判事をへて広島・東京で弁護士として活動。大正3年東京市会議員、6年衆議院議員(当選5回、民政党)となる。昭和4年商工政務次官。東京弁護士会会長。
横山 鉦太郎			○	○	○	法曹		横浜地方裁判所長
たかぎ ますたろう 高木 益太郎	○		○	○	○(実行委員)	政治		明治－昭和時代前期の政治家。明治24年弁護士を開業し、30年「法律新聞」を発刊。41年衆議院議員(当選6回、民政党)。昭和4年12月11日死去。
田中 有橘			○	○	○			不明
棚町 丈四郎			○	○	○			不明
高野 多助			○	○	○			不明
向山 庄太郎			○	○	○	芸能		東京浪花節協会副会長※5
上原 好雄		○	○	○	○			不明

名前 (資料の並び順に従った)	発足時参加者※1	「大岡忠相公塋域復興計画意書」発起人	属性			略歴
	呼掛け人	招待者	※2	※3	※4	
くぼた せいтарろう 窪田 静太郎			○	○	○	官僚 明治 - 昭和時代前期の官僚、社会事業家。内務省衛生局長、行政裁判所長官、枢密顧問官を歴任。明治41年中央慈善協会を設立。
くろずみ なりあき 黒住 成章				○	○	政治 大正 - 昭和時代前期の政治家。函館で弁護士を開業。大正9年衆議院議員(当選3回、政友会)。司法省参与官などをつとめた。昭和3年7月16日死去。
やまだ さぶろう 山田 三良	○		○	○	○(実行委員)	法曹 明治 - 昭和時代の法学者。欧米に留学し、国際私法学の発展につくす。東京帝大教授、京城帝大総長、学士院長、日仏会館理事長などをつとめた。
やまみや とうきち 山宮 藤吉	○		○	○	○(実行委員)	地元 明治 - 昭和時代前期の政治家。神奈川県高座郡鶴嶺村長、神奈川県会議員をへて、明治45年衆議院議員(当選3回)。神奈川県民政党の基礎をきずき、報徳運動を推進した。
山本 久三郎			○	○	○	不明
やまおか まんのすけ 山岡 万之助					○	官僚・政治 明治 - 昭和時代前期の官僚、政治家。東京地裁判事をへてドイツに留学。司法省刑事局長、内務省警保局長などをつとめた。治安維持法の制定にかかわり、三・一五事件検挙を指揮。貴族院議員。日大総長。
まつい しげる 松井 茂			○	○	○	官僚 明治 - 昭和時代前期の官僚。内務省にはいり、韓国内部警務局長、静岡・愛知県知事、警察講習所長などを歴任した。昭和9年貴族院議員。
松井 和義			○		○	不明
まえだ よねぞう 前田 米蔵			○		○	政治 大正 - 昭和時代の政治家。弁護士をへて、大正6年衆議院議員(当選10回)。政友会に属し、商工、鉄道、運輸通信の各大臣を歴任。
まきの きくのすけ 牧野 菊之助			○	○	○	法曹 明治 - 昭和時代前期の司法官。明治26年前橋地方裁判所判事。東京地方裁判所長、大審院部長などをへて、昭和2年大審院長となる。のち日大法学部長。

昭和初期における大岡忠相顕彰運動の展開

名前 (資料の並び順に従った)	発足時 ※1	会合参加者 ※1	「大岡忠相公望 城復興計画趣 意書」発起人			属性	爵位	略歴
	呼掛け人	招待者	※2	※3	※4			
こいずみ またじろう 小泉 又次郎	○		○	○	○	政治		明治後期・大正・昭和期の政治家。県会議員、横須賀市会議員、同市会議長を歴任。明治40年衆議院議員に当選、以来12回当選。大正13年衆議院副議長、昭和4年逓信大臣。昭和9年横須賀市長に就任。
こくぼ きしち 小久保 喜七		○	○	○	○	政治		明治－昭和時代前期の自由民権運動家、政治家。明治17年の加波山事件や翌年の大阪事件、22年の大隈重信狙撃事件で逮捕されるが、無罪。のち茨城県会議員などをへて、41年衆議院議員(当選6回、政友会)。昭和3年貴族院議員。
おばら なおし 小原 直			○		○	法曹・政治		大正－昭和時代の司法官、政治家。司法省にはいり、東京地裁検事正、大審院次席検事などをへて、昭和9年岡田内閣の法相。14年阿部内閣の内相兼厚相。貴族院議員。
古森 幹枝			○	○	○			不明
えぎ たすく 江木 翼		○	○	○	○(実行委員)	政治		大正－昭和時代前期の官僚、政治家。大正元年、3年について13年第1次加藤高明内閣で3度目の内閣書記官長となる。この間の5年貴族院議員。14年第2次加藤内閣、15年第1次若槻内閣の法相。昭和4年浜口内閣、6年第2次若槻内閣の鉄道相。
青山 典山			○	○	○			不明
浅田 福次郎			○		○			不明
きし せいいち 岸 清一		○	○	○	○(実行委員)	法曹		明治－昭和時代前期の弁護士、スポーツ功労者。帝国大学在学中ボート選手として活躍。卒業後弁護士となり、民事訴訟法の権威として知られる。大日本体育協会会長、IOC委員もつとめた。
木内 伝之助			○	○	○			不明
みやた みつお 宮田 光雄			○	○	○	官僚・政治		明治－昭和時代前期の官僚、政治家。明治11年11月25日生まれ。貴族院書記官、福島県知事をへて大正9年衆議院議員、13年貴族院議員。政友会に属し、昭和2年鈴木喜三郎内相のもとで警視総監となり、三・一五事件などを指揮した。
みき いたろう 三木 猪太郎			○	○	○	法曹		明治－昭和時代前期の司法官。宮城、広島、名古屋の控訴院検事長をへて、大正13年東京控訴院検事長。

名前 (資料の並び順に従った)	発足時参加者※1		「大岡忠相公塋域復興計画意書」発起人			属性	爵位	略歴
	呼掛け人	招待者	※2	※3	※4			
しづさわ えいいち 渋沢 栄一			○	○	○	実業	子爵	明治 - 大正時代の実業家。一橋家につかえ、幕臣となる。慶応3年徳川昭武にしたがって渡欧し、西洋の近代産業や財政制度を見聞。維新後、大蔵省にはいり、財政・金融制度などを立案。明治6年退官後、第一国立銀行のほか、王子製紙、大阪紡績などの設立に関与。引退後は社会事業につくした。
しおの すえいこ 塩野 季彦			○	○	○	法曹・政治		明治 - 昭和時代の司法官、政治家。検事として三・一五事件、五私鉄疑獄事件などを担当。大審院次長検事などをへて、林・第1次近衛・平沼内閣の法相。
さかたに よしろう 阪谷 芳郎	○		○	○	○(実行委員)	政治	男爵	明治 - 昭和時代前期の官僚、政治家。大蔵次官をへて第1次西園寺内閣の蔵相、のち東京市長、貴族院議員、専修大総長などをつとめる。また多数の団体に関係し、「百会長」とよばれた。
ひらつか ひろよし 平塚 広義			○	○	○	官僚		大正 - 昭和時代の官僚。内務省にはいり、新潟県内務部長などをへて、栃木・長崎・兵庫各県の知事をつとめ、大正14年東京府知事。昭和7年台湾総督府総務長官。14年貴族院議員。
ひらぬま りょうぞう 平沼 亮三			○	○	○	政治・実業		大正・昭和期の政治家、実業家。明治41年県会議員、43年横浜市会議員、大正4年衆議院議員に当選。昭和7年・14年貴族院議員。
ひらぬま きいちろう 平沼 騏一郎		○	○	○	○	法曹・政治	男爵	明治 - 昭和時代前期の司法官、政治家。検事総長、大審院長をへて、大正12年第2次山本内閣の法相。13年右翼結社国本社を結成。
ひろせ ぜんじ 広瀬 善治			○	○	○	地元		大正・昭和期の小出村長。明治34~36年小出村収入役、大正4年高座郡会議員を経て、5~9年まで小出村長。13年県会議員。昭和3年再び小出村長となり、8年退職。
菱科 顕順	○		○	○	○(実行委員)	地元		浄見寺二十三世住職

昭和初期における大岡忠相顕彰運動の展開

名前 (資料の並び順に従った)	発足 ※1	時 参加者	「大岡忠相公塋 域復興計画趣 意書」発起人			属 性	爵 位	略 歴
			※2	※3	※4			
ひらかわ まつたろう 平川 松太郎			○		○	政治		大正・昭和期の政治家。大正13年から衆議院議員に連続8期当選。
もとだ はじめ 元田 肇		○	○	○	○	政治		明治－昭和時代前期の政治家。明治23年衆議院議員(当選16回、政友会)。第1次山本内閣の逋信相、原内閣・高橋内閣の鉄道相をつとめ、衆議院議長をへて政党人として初の枢密顧問官となった。
森 富太			○	○	○	芸能		浅草劇場主※6
ももかわ じょえん 桃川 如燕			○	○	○	芸能		明治－昭和時代前期の講談師。3代一竜斎貞山の門から2代伊東燕国(初代桃川如燕)の門下となり、若燕を名のる。明治31年2代如燕をついだ。昭和4年9月30日死去。
すずき きさぶろう 鈴木 喜三郎			○	○	○	法曹		大正・昭和期の司法官僚・政治家。東京裁判所長、検事兼司法省刑事局長、法務局長、司法次官などを務めた。大正7年貴族院議員。10年検事総長、13年司法大臣に就任。昭和2年内務大臣。
すえのぶ みちなり 末延 道成		○	○	○	○	実業		明治－昭和時代前期の経営者。明治18年、日本郵船取締役。のち明治生命、明治火災取締役をへて、30年東京海上保険(現東京海上火災)会長。貴族院議員。
大竹 齊三郎					○	地元		小出村長、醤油醸造業
中島 熊吉						地元? ?		「駅長」※7
萩原 輝						実業		横浜貿易新報社長※7
はら よしみち 原 嘉道		○				法曹		明治－昭和時代前期の弁護士、政治家。明治26年農商務省を退官して弁護士を開業。昭和2年田中義一内閣法相。5年中央大総長。6年枢密顧問官、のち枢密院議長。
くらとみ ゆうざぶろう 倉富 勇三郎		○				官僚		明治－昭和時代前期の官僚。司法省民刑局長、東京控訴院検事長などをへて、明治43年朝鮮総督府司法部長官となる。大正2年第1次山本内閣の法制局長官。3年貴族院議員、15年枢密院議長。

名前 (資料の並び順に従った)	発足時参加者※1		「大岡忠相公塋域復興計画趣意書」発起人			属性	爵位	略歴
	呼掛け人	招待者	※2	※3	※4			
まつもと じょうじ 松本 丞治※8		○				法曹		大正・昭和時代の商法学者。大正12年山本権兵衛内閣の法制局長官、13年貴族院勅選議員。以後、弁護士を開業するかたわら大学教授、商工大臣、日銀参与・理事、多数の会社の取締役などをつとめた。

- ※1：資料1 昭和2年9月14日〔大岡越前守忠相卿塋域廟宇復興発起人会開催案内〕
 - ※2：資料4 昭和2年12月10日〔書簡〕（大岡越前公廟宇塋域復興発起人有志墓参会関係につき）
 - ※3：資料5 昭和2年12月「大岡忠相公菩提寺塋域復興計画趣意書(校正刷)」
 - ※4：資料6 昭和3年6月14日〔書簡〕（大岡越前守復興資金募集の件につき）
 - ※5：『横浜貿易新報』昭和4年7月23日号
 - ※6：『横浜貿易新報』昭和2年12月18日号
 - ※7：資料12 昭和4年10月12日〔大岡忠相卿紀年碑材料〕（大岡忠相公塋域復興計画趣意書、大岡越前守塋域廟宇復興紀年碑銘文案、大岡忠相生没年等覚書）
 - ※8：「丞」は「丞」か
- <典拠>『日本人名大辞典』、『日本近現代人名辞典』、『神奈川県史 別編1 人物』、『茅ヶ崎市史史料集第六集(二) 山宮藤吉日記(下)』(茅ヶ崎市、2012年)付表、『横浜貿易新報』

2.2. 運動の変容

阪谷加入後、それまでほぼ山宮一人で担ってきた顕彰運動の組織化が、急速に図られていく。昭和2年9月26日、さらに同年10月29日には有志の会合がもたれ、実行委員長・委員の具体的人選、復興計画趣意書の検討等がなされた(資料4・5、表1 No. 53~55)。それらを経て12月1日、日本倶楽部において「大岡復興発起人会」が開催され、趣意書の文面が決定されている(資料5・24、表1 No. 62)。それと同時に、発起人の顔ぶれも概ねかたまった(表2。ただし、翌年まで若干の異動がみられる)。

さらに同月16日には、有志による墓参会が実施されている(資料4、表1 No. 63)。この墓参会については『横浜貿易新報』でも報じられた。同紙によれば「総経費二万円を以て墓所の修理・菩提寺浄見寺の建築、旧陣屋跡の公園建設、記念碑建立等の事業を為すべく計画中」であり、そのための視察として「阪谷男爵、横山横浜地方裁判所長、東京第一弁護士会長岸清一氏、警視庁警務練習所長松井茂氏、藤井弁護士、浅草劇場主森富太氏、岡崎久次郎氏、山宮代議士、新田茅ヶ崎町長、佐野茅ヶ崎駅長等を初め、茅ヶ崎町・小出村の有力者五十余名」が参列した。そして墓参の様子を一目みようとして「附近の老幼男女見物人も群集して、霜枯れの荒涼たる堤の高台に時ならぬ人出を見

た」という(参考資料1)。

この頃、運動のありかたをめぐって二つの変化が生じていることを指摘しておきたい。ひとつは発起人層の多様化である。それまで山宮が賛同を募ってきたのは、先述した如く法曹界や政財界関係者が中心であった。しかし山宮は、発起人の裾野を広げることが企図し、阪谷に対し「尚此外に市内消防組・俳優・講談師の重立人の加入を求めんハ如何」と提案、阪谷もこれに同意している(資料3)。そしてもうひとつの変化は、運動そのものの性格の変化である。当初この復興運動は、『山宮藤吉日記』を見る限り、もっぱら「大岡廟宇瑩域復興」もしくは「浄見寺復興」などと称されてきた。つまり、目的はあくまで大岡「家」の墓域、そして菩提寺である浄見寺の復興におかれていたのである。ところが、昭和2年12月1日に決定された趣意書のタイトルは「大岡忠相公瑩域復興計画趣意書」であり、内容的にも大岡忠相個人の事績をひたすら称賛するものとなっている(資料4・5)。また、墓参会の呼びかけ人、岸清一の肩書は「忠相会実行委員長」なのである(資料4)。つまりこの段階に至ると、大岡忠相一人に、意図的にスポットライトが当てられていることが一目瞭然である。いったいなぜだろうか。それをとく鍵は、当該時期の社会情勢にある。

運動が開始された昭和2年は、折悪しく日本中に不況が襲い始めた時期でもあった。そのような時期に資金を調達するのがいかに困難であったかは、想像に難くない。計画の完遂がいつを目途にしていたのかは不明であるが、趣意書中に「公逝いて茲に二百年」云々とあり⁽¹⁰⁾、また翌年の『横浜貿易新報』にも「本年は恰も公逝いて二百年にも相当する処から」「大岡越前守廟宇復興会を組織」(参考資料2)とあることを鑑みるに、おそらくはそう遠くないうちの完成を目指していたのであろう。ところが不況のせい、あるいは山宮が中央政界引退に伴い多忙をきわめたためか⁽¹¹⁾、昭和3年に入ってから動きが停滞している。見かねた阪谷が昭和3年5月1日には山宮および菱科顕順に対し「怠慢ヲ責メ督励ヲ加」え、さらに同月11日にも「モツトヅンハ、進行スルコト」と檄を飛ばしたほどであった(資料24)。にもかかわらず、山宮の日記で確認する限り、昭和3年中は寄付金集めにもっぱら翻弄されており⁽¹²⁾、それ以上の具体的な動きはみられない。

話を元に戻そう。要するに、法曹界や政財界からの賛同を募るだけでは自ずと限界

があった。そこで、あくまでも優先順位の第一は法曹関係者としつつも(資料6、「此挙ニ付テハ先ツ法曹各位ニ可成多数ノ賛成ヲ得テ企画ノ遂行ヲ期シ度」)、消防関係者や俳優をも巻き込むことによって行き詰った現状の打開を図ったのである。となると、より多くの人々に訴えかけうるアピールポイントが不可欠である。大岡家廟・浄見寺復興ではあまりにもインパクトに欠けるからだ。そこでフィーチャーされたのが、「大岡政談」を通じて一般庶民にまでひろくその名を知られていた名奉行「大岡越前守忠相」だった、というわけである。消防組を担ぎ出そうとしているのは(表1 No. 119)、言うまでもなく大岡忠相が江戸町火消の創設者として知られていたからであり、俳優や講師をもターゲットとしているのは、大岡政談とコラボレーションすることによる宣伝効果を狙ったからにほかならない。げんに講師や浅草の劇場主らが発起人として名を連ねており(表2)、俳優協会や歌舞伎座などに対しても協力を要請している(表1 No. 57~59・173)。興味深いことには、結局は不首尾に終わったものの、歌舞伎の大名跡である中村歌右衛門まで担ぎ出そうとした形跡も見受けられる(表1 No. 59)。

さて、昭和4年に入ると、山宮は多くの時間を運動に費やしている。とくに2月には東京を拠点とし、息子の昌平をも動員して「大岡運動」に奔走した(表1 No. 92~100)。その甲斐あってか、運動はようやく軌道に乗り始めた。皮切りとなったのが、沼田頼輔の協力を仰いでの大岡忠相評伝出版および講演会の実施である。『山宮藤吉日記』によると、3月10日に小出小学校にて講演が行われ、その後5月末までには評伝『大岡越前守』⁽¹³⁾が上梓されている(表1 No. 99・101~103・105~111、資料8)。

さらに8月1~4日には、「帝都消防組」の後援を得た浪曲大会が東京の本郷座にて開催された(資料10)。ここでは「後世に其(引用者注・大岡忠相)の治績を伝へ」るのが廟宇復興会の主眼であること、そしてこの浪曲大会は「大岡政談にちなんだ」ものであることが明言されている。この「寄附興行」は、「御一名金二円五十銭」の収益を見込んでいた。『横浜貿易新報』でもこの浪曲大会について、「其の収益を挙げて該復興会に寄附することとなつた」と述べられているとおり(参考資料3)、復興の資金に充てること、それがこの大会の最大かつ唯一の開催目的であった。こと資金集めに関しては、発起人ですら支払いを督促される始末であった(資料18、表1 No. 154)ことから窺い知られる如く、難航をきわめたものとみられる。もちろん、発起人以外

の「賛同者」からの寄付金も募っていたが（資料6）、果たしていかほどの数の人々が積極的に拠出したであろうか。おそらくは、山宮をはじめとする発起人への義理で応じざるを得なかった人々が大半ではなかったか。そこで打開策として模索されたのが、発起人や賛同者からの醸金だけに頼らない、いわば「第三の道」による金策だったと推測する。そしてその際のアピールポイントは、ぜひとも一般庶民の耳目をひくもの＝大岡政談でなければならなかったのである。

このような「復興運動の一手段としての興行」は、おそらくは一定程度の成功をおさめたのであろう。というのも、顕彰碑除幕式の直前にあたる昭和5年10月、こんどは東京・歌舞伎座において「大岡越前守ト天一坊」が上演されているからである（資料24）⁽¹⁴⁾。この時期にこの演目というのは、もちろん、ただの偶然ではない。発起人らの強い働きかけによって実現したものと考えるのが妥当だろう。なお、主役を演じた市川左団次は、除幕式でも幕の紐を引く大役をつとめている。つまりこの上演は、除幕式に向けた恰好の宣伝材料として利用されたのである。事実、建碑除幕式の案内状でも、「当日市川左団次参列せらるゝ予定なり、其廟宇の写真並に記念碑の拓本は歌舞伎座内に掲げある」ことが大々的に謳われている（資料20。ただし、この目論見は結局成功しなかった。表1 No. 173）。そこまでして、集客にいそしんだのは何故か。おそらくは、収益の一部を運動資金に充当する心積りだったのだろう。というのも、資金繰りは最後まで難航したからである。除幕式当日に至っても、予定額2万円のうち、1万8千円しか集まっていなかったという（参考資料7。ただし資料18には、昭和5年4月30日現在で寄付金総計1万8698円とある）。

蛇足だが、歌舞伎座公演の内容に関しては、横浜市中区の「在野法曹」から長文の苦言が寄せられるという、いささか有難くない「おまけ」も付いた（資料19）。

3. 顕彰碑除幕式

以上の如き紆余曲折はあったものの、昭和4年になると次第に資金の見通しも立ちはじめ、いよいよ建碑に向けて動き出している。もともと金2万円の寄附金額が目標とされていたが、昭和4年9月にはようやく1万7千円集まったとして（参考資料4）、工事着手に向けた話し合いの場がもたれている（資料11、表1 No. 129）。これをうけて、

碑の篆額・撰文の依頼(資料12・13、表1 No. 131・133・136・139・146・151・161)や設計事務所の選定といった具体的作業に入った。東京の設計事務所との交渉が不首尾に終わるなど(表1 No. 130～132・134・135)、必ずしも順調にはいかない局面もあったが、それでも翌5年1月12日には起工式にたどり着くことを得た(資料14～16)。

その後、4月20日には上棟式(資料17・18)、そしていよいよ10月19日、除幕式当日を迎える。この除幕式に際しては、先述した歌舞伎座での公演による宣伝効果とともに、『横浜貿易新報』における事前の報道(参考資料5・6)も、おそらくは人々の関心を掻き立てるのに、大いに寄与したであろう。ちなみに『横浜貿易新報』以外の新聞もこの除幕式について報じている。たとえば『東京朝日新聞』昭和5年10月16日号には、「大岡越前守の廟を復興 舞台の同役左団次も参列」との記事が掲載された(資料24)。たとえ大岡忠相には興味がなくとも、左団次は一目見てみたいと思った人々もまた、除幕式の見物に数多く押し寄せたであろうことは、想像に難くない。

こうして迎えた除幕式の一部始終は、資料20および『横浜貿易新報』(参考資料7)に詳しい。これらをもとに、当日のようすを再現してみよう。

式は午前11時から開始された。まずは建碑除幕式である。広瀬善治小出村村長の挨拶、山宮藤吉の報告、岸清一の式辞、阪谷芳郎および岡崎久次郎の祝辞と続いたのち、いよいよ市川左団次・阪谷芳郎・大岡忠綱令嬢の手によって記念碑の除幕が行われた。除幕後、浄見寺住職菱科顕順による洒水の儀式、東京市消防各組の木遣り節演奏を以て式典は終了した。

引き続き参列者一行は本堂入仏式に向かう。菱科および動員された僧侶数十名によって仏前回向が執行され、菱科および大岡忠綱の挨拶を以て終了した。その後は昼食に移り、午後3時から余興として、境内の仮設舞台において村芝居が挙行された(なお、山宮は余興の開始時刻を午後4時としているが(表1 No. 181)、ここではとりあえず資料20および『横浜貿易新報』の記述に従い、午後3時としておく)。当日の出席者には、記念品として絵葉書5枚および浄見寺縁起などを記した印刷物が配られている(資料21)。なお、これらの記念品は後日、醵金に応じた賛同者にも郵送された(表1 No. 184)。

この日の浄見寺境内は、「朝野多数の名士」はもちろん、「小出村を始め茅ヶ崎其他

附近町村の参拝者を以て（中略）立錫の余地なき賑わい」で、「夜遅くまで賑わい小出村未曾有の盛況」（参考資料7）だったというから、事前の宣伝効果がいかに絶大であったかがよくわかる。

ただし、この除幕式を以て一件落着という訳にはいかなかった。山宮らには決算書作成とともに、不足分の資金を充当するという大仕事が残っていた。除幕式後も相変わらず山宮は金策に奔走している。一例を挙げれば、除幕式後の昭和5年12月に山宮は、神奈川県知事の紹介を得て厚木の名士小塩八郎右衛門に面会し、50円の寄付金を貰い受けている（表1 No. 188・189・191）。こうした努力にもかかわらず、結局、最終的な収支は赤字であった。昭和6年3月末の決算報告によると、収入20,886円98銭に対し支出は20,907円68銭、差引20円70銭の不足であった。この不足分は発起人（おそらくは山宮を含めたごく数人であろう）が負担せざるを得なかったのである（資料22）。

おわりに—大岡忠相顕彰運動の歴史的意義—

顕彰運動の端緒から終了に至るまでの経緯については以上に述べてきたとおりであり、屋上屋を重ねることはしないでおく。ただ、この運動が何のために行われたのか、いかなる歴史的意義を見出し得るのかといった点に関して、本論ではいまだ言及していない。そこで本論を締めくくるにあたり、少々、そのことについて見解を述べておきたいと思う。

昭和初期の建碑を考えると、昭和2（1927）年の明治節制定、そして翌3年11月の昭和天皇即位大典にその理由を求めるのは、一見理にかなっているように思われるかもしれない。なぜならば、神奈川県内だけを見渡しても、これらを好機とした明治天皇関係の史蹟整備や建碑が、地域の様々な思惑を孕みつつ急速にすすめられているからである⁽¹⁵⁾。

しかし、今回検討した大岡忠相顕彰運動のケースにもそれを当てはめるのは、いささか無理がある。そもそも運動が始まったのが大正15（1926）年初頭であり、昭和天皇即位と絡めるのは論理的に飛躍している。ただ、そのいっぽうで、「大岡忠相公塋域復興計画趣意書」には「殊に公は夙に勤王の志篤く、山陵（引用者注・天皇の墓）の荒廃を嘆き、之を修理して下民に皇室尊崇の範を垂れ」（資料4）たとある⁽¹⁶⁾。だが、

これはほんの「付けたり」に過ぎず、記述も他の事績と比べると簡素である。おそらくはこの時期、顕彰運動に対する公権力の「お墨付き」を獲得するうえで、勤王家だったという大義名分が不可欠だったからに過ぎないだろう。

だとするならば、とくに山宮などは私財を投入してまで顕彰運動に没頭し、曲がりなりにも建碑までこぎつけているわけだが、そこまで彼らを駆り立てたものはいったい何だったのか。浄見寺住職菱科顕順にとってのメリットは、単純明快である。彼は自力では到底なしえない大岡廟および本堂の再建を、他者を頼ることによって成し遂げようとしたまでのことである。とすると、阪谷や山宮ら、とくに山宮の熱意の淵源をいったいどこに求めるべきなのか。

私見では、山宮が当初この顕彰運動にかかわったのは、地域名望家としての責務の一環、それ以上でもそれ以下でもなかったと考える。しかし運動はやがて彼一人の手に負える規模ではなくなり、組織化に伴い性格も変化していく。その転機となったのが、消防組や俳優、講談師、興行主らの参入である。とくに彼らの力が全面的に発揮されたのが、昭和4年の浪曲大会であった。「大岡政談」がいかにも絶大な効果を発揮するか、再認識せざるを得なかったであろう。いや、もしかしたらそれ以前から山宮は、大岡忠相というネームバリューのもつ力を理解していたのではないか。再度引用するが、昭和2年12月の墓参について報じた『横浜貿易新報』には、「附近の老幼男女見物人も群集して、霜枯れの荒涼たる堤の高台に時ならぬ人出を見た」とある(参考資料1)。この時点で山宮は、大岡忠相の名を利用し人々の興味関心を巧みに喚起することによって、顕彰運動を集客、ひいては地域振興・活性化に繋げうることに気づいたのではなかろうか。とすると、たとえ発起人として名を借りた政財界や法曹界の重鎮らが寄付金の拠出に消極的であろうが、最終的に収支が赤字となり自弁せざるを得なくなろうが、除幕式という恰好の舞台で「小出村未曾有の盛況」(参考資料7)を生み出し得た以上(いささか誇張はあろうが、阪谷によれば「来会者遠近数千人」だったという。資料24)、山宮は名望家として十二分に地域に貢献したことになる。

事実、この翌年から、関東大震災以来途絶していた大岡祭⁽¹⁷⁾が復活する。昭和6年4月15日、復興第一回と称して大岡祭が行われ、少なくとも昭和12年までは継続して実施された⁽¹⁸⁾。山宮が膨大な時間と私財を費やして成し遂げた顕彰運動は、震災

によっていったんは潰えた、大岡忠相という小出村・茅ヶ崎町周辺地域にとって恰好の地域資源と、それによる「地域おこし」の可能性を再認識させ、ついには新たな「茅ヶ崎名所」を創出するに至った(資料21、絵葉書)という意味において、一定の歴史的意義があったと評価することができるだろう。

【注】

- (1) ただし大口勇次郎氏によれば、大岡家と浄見寺との関係は江戸時代後期にいったん途絶え、明治末年になって復活したものである。とくに忠相の子孫は、三河国に陣屋を設けたこともあって、浄見寺との関係は薄かったという(大口勇次郎『ちがさきと大岡越前守』茅ヶ崎市史ブックレット12、茅ヶ崎市史編集委員会編、茅ヶ崎市、平成22年、第一章)。
- (2) 「贈四位大岡忠相公廟宇瑩域修築記念碑」および「大岡忠相公頌徳碑」の碑文については、塩原富雄『資料館叢書10 茅ヶ崎の記念碑』(茅ヶ崎市文化資料館平成3年) p. 16~18に翻刻が掲載されているので、本論では割愛する。
- (3) 注(1)大口書、第一章。
- (4) 茅ヶ崎市史資料集第六集(一)・(二)『山宮藤吉日記(上)・(下)』(茅ヶ崎市、平成23・24年)。
- (5) 『歴史評論』No. 848(2020年12月号)特集・19世紀日本の人物顕彰、ほか。
- (6) 古書店の付箋が混入していたため、おそらくは購入資料であろう。
- (7) 社団法人尚友倶楽部・櫻井良樹編『阪谷芳郎東京市長日記(尚友叢書12)』(社団法人尚友倶楽部 平成12年)。
- (8) ①上山和雄『陣笠代議士の研究 日記にみる日本型政治家の源流』(日本経済評論社 平成元年)。
②同『山宮藤吉と神奈川県政の政情』(茅ヶ崎市史ブックレット19、茅ヶ崎市史編集委員会編、茅ヶ崎市、平成29年)。
- (9) なお、資料2には「発起人会」とあるが、発起人会の正式な発足は同年12月1日なので、ここでいう「発起人会」とは打合せのための会合を指す。
- (10) 大岡忠相の没年は宝暦元(1751)年なので、これは事実誤認である。

- (11) 昭和3年、山宮は政界を引退し地盤を岡崎久次郎に譲っているが、その前年、地盤譲渡になかなか踏み切らない山宮の態度に業を煮やした岡崎との間に一悶着が生じている(注(8)①・②上山書)。
- (12) 寄附を募る対象は、東京の中心部に事務所を構える弁護士(表2No.69・70)、山宮の地元である茅ヶ崎の住民(表2No.74)、近県の弁護士会長(表2No.82)、さらに大岡子爵家(大岡忠相の子孫。表2No.83・84)などであった。
- (13) 沼田頼輔『大岡越前守』(明治書院 1929年)。国立国会図書館ホームページ(デジタルコレクション)で閲覧可能。<https://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/1187732> 令和3年3月1日現在)
- (14) 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館ホームページ「早稲田大学文化資源データベース 演劇上演記録データベース」にて、額田六福作「大岡越前守と天一坊」が歌舞伎座において上演されたことを確認できる(初日は昭和5年10月2日)。
- (15) 神奈川県教育会編『明治天皇神奈川県聖蹟地一覧表』(刊行年不明)、石野瑛『明治天皇と神奈川県』(武相学園 昭和36年)、寺寄弘康「明治天皇聖蹟顕彰運動の地域的展開—神奈川県を事例に」(横浜国際関係史研究会・横浜開港資料館編『GHQ情報課長ドン・ブラウンとその時代—昭和の日本とアメリカ』日本経済評論社平成21年)、吉田律人「神奈川区に残る明治天皇の「聖蹟」」(『開港のひろば』136、横浜開港資料館 平成29年)、拙稿「一八八一年(明治一四)浦賀・横須賀行幸をめぐる地域の記録と記憶」(大豆生田稔編『港町浦賀の幕末・近代—海防と国内貿易の要衝—』(清文堂出版 令和元年)、ほか。
- (16) 大岡忠相は寺社奉行として山陵を管轄していたが、任期中に特段の策を施した形跡はない(注(1)大口書、p. 3)。したがって、これは事実誤認である。
- (17) 大岡祭は大正2(1913)年3月9日の「贈位祭」にはじまり、翌年からは「大岡越前守大祭」と名前を変えて大正12年の第11回まで継続したが、関東大震災により途絶していた(注(1)大口書、p. 5～6)。
- (18) 注(1)大口書、p. 7。

資料 1 昭和 2 年 9 月 14 日「〔大岡越前守忠相卿瑩域廟宇復興発起人会開催案内〕」
(資料ID2201800201)

(封筒表)
「 小石川区原町
坂 谷 芳 郎 殿

21 一時出墓会より 」

(封筒裏) (後筆)
「 牛込富久町八六
山宮藤吉 」

坂 谷 芳 郎
山 田 三 良

拝啓、追日秋冷相催候処、益々御清穆奉慶賀候、陳者御配慮願上置候大岡越前守忠
相卿^(等)瑩域廟宇復興の件、愈々実行に着手致度候に就ては、御迷惑ながら発起人とし
て御尽力に預り度懇願仕候、尚来る九月二十六日午後五時
日本倶楽部に於て発起人会を開き、右計画遂行の方法等御協議願上度候間、御多忙
中恐縮の至に存候へども、何卒御差繰り御貴臨被成下度願上候 敬具

昭和二年九月十四日

伊 藤 長 次 郎
鳩 山 一 郎
花 井 卓 蔵
穂 積 重 遠
富 谷 銚 太 郎
横 田 秀 雄
高 木 益 太 郎
小 泉 又 次 郎
阪 谷 芳 郎
山 田 三 良
山 宮 藤 吉
菱 科 顕 順

殿

副申

御手数恐入候へども、御来否共九月二十二日迄に別紙端書にて折返し御一報下され度願上候

本書は左記の各位へ差出置候間御承知被下度、尚発起人に御願すべき御心当り御注意賜り度願上候

大岡育造君	床次竹二郎君	横山勝太郎君
小久保喜七君	元田肇君	上原好雄君
岡崎久次郎君	江木翼君	小山松吉君
岡田良平君	浜口雄幸君	仁井田益太郎君
原嘉道君	平沼騏一郎君	窪田静太郎君
乾政彦君	岩田宙造君	倉富勇三郎君
岸清一君	末延道成君	花井卓蔵君
池田宏君	大橋新太郎君	岡崎正也君
和仁貞吉君	牧野菊次郎君	松本丞治君

其他数名

資料2 昭和2年9月23日「〔書簡〕（大岡廟復興発起人会開催につき出席願）」
 (資料ID [2201800002](#))

(封筒表)

「 小石川区原町

男 爵 阪 谷 芳 郎 殿

(封筒裏)

「

↗

牛込区富久町八十五
山 宮 藤 吉

拝啓、先以御清栄奉大賀候、陳者大岡廟復興之件に付閣下の御声掛のため山田博士大に御承引下され、来二十六日午後五時日本倶楽部にて発起人会開催の処、当日夕刻にてハ御差支之由、恐縮の至に存候、本件に付てハ閣下を唯一の援護者と頼み居

昭和初期における大岡忠相顕彰運動の展開

候場合、一寸時分過とも御差繰御御出席下され度、態々参上可致の処、乍略儀書中を以て御願申上候、頓首

九月二十三日夕

山 宮 藤 吉

阪 谷 男 爵閣下

資料3 昭和2年11月3日「〔書簡〕(大岡越前守廟宇復興発起人へ市内消防組等の加入を求めることへの賛否伺い)」(資料ID[2201800203](#))

(封筒表)

「 小石川区原町

阪 谷 男 爵 郎 殿

(後筆)

「十一月三日同意ス」

(封筒裏)

「

」

牛込区富久町八十五
山 宮 藤 吉

拝啓、先以御清穆奉賀候、陳者予而より御高配を被りつゝある大岡越前守廟宇復興に付、発起人増加致度、大審院・控訴院・地方裁判所・区裁判所各長官・検事等の賛成相求め候、尚此外に市内消防組・俳優・講談師の重立人の加入を求めんハ如何、此件閣下の御意見可相伺様、岸清一氏の意見に基き参上御面会可致の処、御不在勝に付、甚た恐縮の至に候へとも、御賛否御一報被成下度、此段御願申上候、頓首

十一月三日

山 宮 藤 吉

阪 谷 男 爵閣下

資料4 昭和2年12月10日「〔書簡〕(大岡越前公廟宇瑩域復興発起人有志墓参会関係につき)」(資料ID[2201800204](#))

(封筒表)

「 小石川区原町

男 爵 阪 谷 男 爵 郎 殿

(封筒表後筆)

「四時ニ前約アリ
一寸見テ
スクニ帰ル」

(封筒表後筆)

「大岡越前守

(ママ)

三年十二月十六日
(命日)

十二時十分東京駅発
四時三十五分茅ヶ崎発

一時半茅ヶ崎
六時八分東京」

(封筒裏) (封筒表後筆)
「レスピラートル、メガネ用意」

✍

忠相会実行委員長
岸 清 一

(封筒表後筆)
「二、四一分茅ヶ崎発 四、一三分東京着」

拝啓、大岡越前公廟宇瑩域復興の件に付、去る一日発起人会を開き着々進行する事に決し、尚本月十六日ハ公之命日に該当するを以て発起人有志墓参会相開き候間、左之条項御承知之上御参会被下度、此段御案内申上候、敬具

昭和二年十二月十日

忠相公実行委員長
岸 清 一

十二月十六日正午十二時十分東京駅発、一時三十分茅ヶ崎町下車、自動車の用意あり

帰途午後四時三十五分茅ヶ崎発、六時八分東京駅着

来る十四日迄に御賛否御通知被下度候

男爵 阪 谷 芳 郎殿

大岡忠相公瑩域復興計画趣意書

徳川氏幕政三百年間の法制は享保寛政の間に大成し、法典の編纂と法制上の施設とは相俟て此の時代に完備し、治績甚だ観るべきものあり。世称して享寛の治となす。而して之に与つて力甚だ大なるものありしを、我が大岡忠相公とす。洵に公の立法上の事蹟は燦として百世を照すに足るものあり。而も公は単なる立法家にあらず。訴を聴き獄を断ずるや真に神の如く、今に至つて尚後人其徳を敬仰して已まず。蓋し公は質性剛直にして清廉潔白、而も寛仁大度にして下民を愛撫し、公明にして私心を挟まず、虚心にして予断を懐かず、善く下情に通じ表裏に詳しく、事に当るに赤誠を以てし、事を処するに縦横の機才を以てす。犯罪の捜査証拠の蒐集の如き、公を俟て初めて遺憾なきを得たりと謂ふべく、才鋒穎脱、常人の端倪を許さず、寸毫を以て能く巨象を弁じ、仮面を擺剥して真相を把捉す、裁決流るゝが如くにして而も獄を断じて未だ誤を犯さず。臬司人ありと雖も公は洵に比儔を絶つ。世に所謂大岡裁判として伝へらるゝもの、多くは稗史仮託の類に属すと雖も、亦以て公の風

丰の片鱗を窺ひ、余芳を思慕する後人の情を推すに足るべし。彼の大阪に相場会所を肇造して取引所の端を開きたるが如き、火事の名所の江戸の防火施設の備らざるを慨して火消「いろは」組を創設したるが如き、又青木昆陽をして甘藷の栽培を奨励せしめて以て食糧問題解決の先駆を為したるが如き、到底凡眼為政治家の能く企及し得べき処にあらず、公が行政家としても亦一世に傑出せるの士たるを想見せしむるに足る。殊に公は夙に勤王の志篤く、山陵の荒廢を嘆き、之を修理して下民に皇室尊崇の範を垂れたるが如き、公の隠れたる事蹟は枚挙に遑あらず。

然るに公逝いて茲に二百年。偶往年の関東大震災に遭逢して神奈川県茅ヶ崎在なる公の菩提寺たる浄見寺も亦其堂宇の倒潰を見、公の墳塋また之が為に破壊す。依て茲に公の徳風を欽慕する者相諮り、公の塋域を修すると共に公の伝記事績を蒐集し、且菩提寺の殿堂を再建し、以て公の高風清節を追慕鑽仰するの道を講ぜんと欲す。聞説く泰西に於ては大法曹の遺跡は永く国民の誇として保存せられ名所として尊重せらると。公の如きは治績は百世を照し、徳は伝へて千載に師表とするに足るの人、亦永く伝へて我國民の一代矜誇とせざるべけんや。吾人は此の如き遺跡を荒廢に委するに忍びざるもの、茲に経費総額約二万円を蒐めんとするに方り、庶幾くは我等の微衷に対し江湖の賛同を得、以て此挙の完成を見むことを。

昭和二年十二月

発起人(いろは順)

伊藤長次郎	池田宏	岩田宙造	乾政彦
一龍斎貞山	井上八重吉	池田寅二郎	泉二新熊
花井卓蔵	浜口雄幸	鳩山一郎	浜田国松
原田繁蔵	西久保弘道	仁井田益太郎	新田信
穂積重遠	星野欽治	床次竹二郎	富谷銈太郎
大岡育造	大橋新太郎	岡田良平	岡崎正也
小山松吉	岡崎久次郎	若尾幾太郎	和仁貞吉
川村楨太郎	金子角之助	神田伯山	横田秀雄
吉田政司	横山勝太郎	横山鉦太郎	高木益太郎

田 中 有 橋	棚 町 丈 四 郎	高 野 多 助	向 山 庄 太 郎
上 原 好 雄	窪 田 静 太 郎	黒 住 成 章	山 田 三 良
山 宮 藤 吉	山 本 久 三 郎	松 井 茂	松 井 和 義
前 田 米 蔵	牧 野 菊 之 助	小 泉 又 次 郎	小 久 保 喜 七
小 原 直	古 森 幹 枝	江 木 翼	青 山 典 山
浅 田 福 次 郎	岸 清 一	木 内 伝 之 助	宮 田 光 雄
三 木 猪 太 郎	渋 沢 栄 一	塩 野 季 彦	阪 谷 芳 郎
平 塚 広 義	平 沼 亮 三	平 沼 騏 一 郎	広 瀬 善 治
菱 科 顕 順	平 川 松 太 郎	元 田 肇	森 富 太
桃 川 如 燕	鈴 木 喜 三 郎	末 延 道 成	

資料5 昭和2年12月「大岡忠相公菩提寺塋域復興計画趣意書(校正刷)」
(資料ID [2201800205](#))

(後筆)

校正刷

二年十二月一日
日本クラブ

大岡忠相公菩提寺塋域復興計画趣意書

徳川氏幕政三百年間の法制は享保寛永の間に大成し、法の典編纂と法制上の施設とは相俟て此の時代に完備し、治績甚だ観るべきものあり。

世称して享寛の治となす。而して之に与つて力甚だ大なるものありしを、我が大岡忠相公とす。洵に公の立法上の事蹟は燦として百世を照すに足るものあり。而も公は単なる立法家にあらず。訟を聴き獄を断ずるや真に神の如く、今に至つて尚後人其徳を敬仰して已まず。蓋し公は質性剛直にして正廉潔白、公明にして私心(ママ)を挟まず、虚心にして予断を懐かず、而も善く下情に通じ表裏に詳しく、事に当るに赤誠を以てし、事を処するに縦横の機才を以てす。犯罪の捜査証拠の蒐集の如き、公を俟て初めて遺憾なきを得たりと謂ふべく、才鋒穎脱常人の端倪を許さず、寸毫を以て能く巨象を弁じ、仮面を擺剥して真相を把捉す、裁決流るゝが如くにして而も獄を断じて未だ誤を犯さず、臬司人ありと雖も公は洵に比儔を絶つ。世に所謂大岡裁判として伝へらるゝもの多くは稗史仮託の類に属すと雖も、亦以て公の風丰の片鱗

を窺ひ、余芳を思慕する後人の情を推すに足るべし。彼の大阪に相場会所を肇造して取引所の端を開きたるが如き、火事の名所の江戸の防火施設の備らざるを慨し火消「いろは」組を創建したるが如き、又青木昆陽をして甘藷の栽培を奨励せしめて以て食糧問題解決の先駆を為したるが如き、到底凡眼為政治家の能く企及し得べき所にあらず、公が行政家としても亦一世に傑出せるの士たるを想見せしむるに足る。殊に公は夙に勤王の志篤く山陵の荒廢を嘆き之を修理して下民に皇室尊崇の範を垂れたるが如き、公の隠れたる事蹟は枚挙に遑あらず。

然るに公逝いて茲に二百年、偶往年の関東大震災に遭逢して公の菩提寺たる浄見寺も亦其堂宇の倒潰を見、公の墳塋また之が為に破壊す。依て茲に公の徳風を欽慕する者相諮り、公の塋域を修すると共に菩提寺の殿堂を再建し、以て治績は百世を照し徳は伝へて千載に師表とするに足る公の高風清節を追慕鑽仰するの道を講ぜんと欲す。聞説く泰西に於ては大法曹の遺跡は永く国民の誇として保存せられ名所として尊重せらると。公の如き亦実に我國民の一代矜誇とせざるべけんや。庶幾くは此の如き遺跡を荒廢に委するに忍びざる我等の微衷に対し、江湖の賛同を得て以て此挙の完成を見むことを。

昭和二年十二月

発起人「(イロハ順)」

伊藤長次郎	池田宏	岩田寅造 ^(ママ)	乾正彦
一龍齋貞山	井上八重吉	花井卓蔵	浜口御幸
鳩山一郎	原田繁蔵	西久保弘道	仁井田益太郎
新田信	穂積重遠	星野欽治	床次 ^竹 床二郎
富谷銈太郎	大岡育造	大橋新太郎	岡田良平
岡崎正也	小山松吉	岡崎久次郎	若尾幾太郎
和仁貞吉	川村 ^徳 積太郎	金子角之助	神田伯山
横田秀雄	吉田政司	横山勝太郎	横山鉦太郎
高木益太郎	田中有橘	棚町丈四郎	高野多助
向山庄太郎	上原好雄	窪田静太郎	山田三良

昭和初期における大岡忠相顕彰運動の展開

発起人(イロハ順) ○印ハ実行委員

伊藤長次郎	池田宏	岩田宙造	乾政彦
一龍斎貞山	井上八重吉	池田寅二郎	泉二新熊
花井卓蔵	浜口雄幸	鳩山一郎	浜田国松
原田繁蔵	西久保弘道	仁井田益太郎	新田信
男爵穂積重遠	星野欽治	床次竹二郎	○富谷銈太郎
故大岡育造	大橋新太郎	岡田良平	岡崎正也
小山松吉	岡崎久次郎	若尾幾太郎	和仁貞吉
川村徳太郎	金子角之助	神田伯山	○横田秀雄
吉田政司	横山勝太郎	横山鉦太郎	○高木益太郎
田中有橘	棚町丈四郎	高野多助	向山庄太郎
上原好雄	窪田静太郎	黒住成章	○山田三良
○山宮藤吉	山本久三郎	山岡万之助	松井茂
松井和義	前田米蔵	牧野菊之助	小泉又次郎
小久保喜七	小原直	古森幹枝	江木翼
青山典山	浅田福次郎	○男爵阪谷芳朗	○岸清一
木内伝之助	宮田光雄	三木猪太郎	子爵洪沢栄一
塩野季彦	平塚広義	平沼亮三	男爵平沼騏一郎
広瀬善治	○菱科顕順	平川松太郎	元田肇
森富太	桃川如燕	鈴木喜三郎	末延道成
大竹齊三郎			

拝啓、益々御清適奉賀候、陳者別紙趣意書ノ通り大岡忠相公塋域復興ノ計画有之候
 処、此挙ニ付テハ先ツ法曹各位ニ可成多数ノ賛成ヲ得テ企画ノ遂行ヲ期シ度キ希望
 有之候条、御繁用中御迷惑ノ儀トハ存候得共、貴管内判事・検事・公証人其他苟
 モ司法ニ関係ヲ有スル各位ニ対シ精精賛同方御勧誘相煩度、此段御依頼旁得貴意候
 敬具

昭和三年五月

実行委員惣代

小 山 松 吉
牧 野 菊 之 助
横 田 秀 雄

(ママ) 殿

追而

- 一、賛同者ノ醸出金額ハ一円以上十円以下トス
- 一、送金方ハ乍御手数取纏メノ上、大審院書記長宛ニ願上候
- 一、以上御勧誘ノ結果ハ、本年七月十日迄ニ御回報相願候

資料7 昭和3年12月3日「〔書簡〕(大岡越前守塋域廟宇復興過半進行につき明年早々発起人会召集願いたく報告)」(資料ID[2201800207](#))

(封筒表)

「 小石川区原町

男 爵 阪 谷 芳 郎 殿

(封筒表後筆)

「三年十二月三日受」

(封筒裏)

「

↗

山 宮 藤 吉
菱 科 頭 順

」

拝啓、先以御清栄奉賀候、陳者予而御高配を煩し候大岡越前守塋域廟宇復興之件過半進行致候に付御協議相願へきの処、歳末相迫候に付、明年早々発起人会召集御願申上度、其内拝顔御高見承るべく候へとも、不取敢経過御報告申上候、頓首

十二月三日

山 宮 藤 吉
菱 科 頭 順

阪 谷 男 爵閣下

資料8 昭和4年5月30日「〔書簡〕（大岡廟復興の件）」（資料ID2201800208）

(封筒表)
「 小石川区原町
男 爵 阪 谷 芳 郎 殿
(後筆)
「五月三十日受」 答拝添 」
(封筒裏)
「 市外東大久保二番地
山 宮 藤 吉
」

拝啓

大岡廟復興之件愈々進行中、其内参上御指図拝受可申候

伝記製本出来に付送本致候、尚御入用之節ハ御通知次第更に送本致すべく候、頓首

五月三十日

山 宮 藤 吉

阪 谷 男 爵 閣 下
侍 史

資料9 昭和4年7月18日「〔書簡〕（大岡越前守復興寄附金額、本郷座での寄附興行等につき報告）」（資料ID2201800209）

(封筒表)
「 小石川区原町
男 爵 阪 谷 芳 郎 殿
侍 史 」
(封筒裏) (後筆)
「 「八月一日一四日本郷座 九月十日発起人会ヲ開クツモリ」
東大久保二番地
山 宮 藤 吉
」

拝啓、予而より御援護下され候大岡越前守復興之件、寄付金一万六千円相纏り、残りハ着々進行中に有之、松竹の向山庄太郎氏の司会によりて、来八月一日より四日間本郷座に於て寄付興行を為す事に準備中に有之、来九月には工事着手、来年四月頃までに竣功為致度と存、九月十日頃発起人等を開きて委細の御相談申上度と存し

候、先は中間御報告申上候、頓首

七月十八日

山 宮 藤 吉

男爵 阪 谷 芳 郎閣下
侍 史

資料10 昭和4年7月27日「大岡忠相公廟宇寄附浪曲大会御案内」

(資料ID[2201800210](#))

(封筒表)

「 小石川区原町

阪 谷 芳 郎 殿

(後筆)

「四年八月1234本郷座浪曲」

(表)

大岡忠相公廟宇
寄 附 浪 曲 大 会
御 案 内

主催 大岡越前守廟宇復興会
後援 帝 都 消 防 組

(裏)

◇舌代

徳川幕政時代の名裁判官として皆様御承知の大岡越前守は、江戸時代火消「いろは組」の創建者でありまして、我等消防組には最も縁故深き御方であります。此のお方の菩提所たる神奈川県茅ヶ崎在浄見寺の堂宇と墳墓が関東大震災の為め倒潰して居りますので、再建して後世に其の治績を伝えたいと考へ、此の経費に充つる為め八月一日より四日迄本郷座に於て大岡政談にちなんだ浪曲大会を催し、収益金を寄附したいと思ひます。

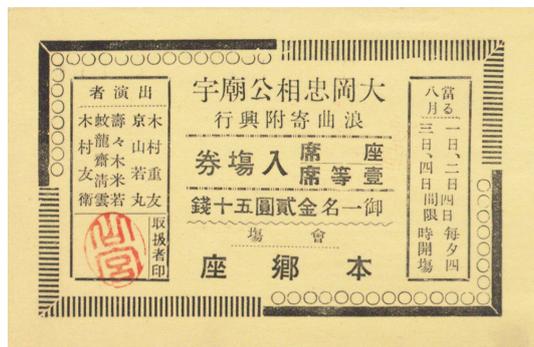
幸に御賛同下さいまして御援助を希上げます。

七月吉日

主催 大岡越前守廟宇復興会

昭和初期における大岡忠相顕彰運動の展開

後援 帝 都 消 防 組



資料11 昭和4年9月18日「〔書簡〕(大岡越前守復興寄附金額、実行委員会開催につき通知)」(資料ID2201800211)

(封筒表)

「 東京市牛込区原町

男 爵 阪 谷 芳 郎 殿

(後筆)

「25十二時日本クラブ」」

(封筒裏)

「

山 宮 藤 吉

」

大変御無沙汰致候処、先以御勇健奉賀候、陳者御高配中の大岡越前守復興の件、寄附金漸く一万七千円と相成候に付、近く工事着手の為め実行委員会を来二十五日正午十二時、昼餐会を兼ね日本倶楽部にて開会致度候間、御出席被成下度、此段御通知申上候、頓首

九月十八日

山 宮 藤 吉

男爵 阪 谷 芳 郎 殿
閣 下

資料12 昭和4年10月12日「〔大岡忠相卿紀念碑材料〕（大岡忠相公塋域復興計画趣意書、大岡越前守塋域廟宇復興紀念碑銘文案、大岡忠相生没年等覚書）」
(資料ID2201800212)

(封筒表)

「

大岡忠相卿紀念碑材料

(後筆)

「四年十月十三日
山宮氏持参」

」

(封筒裏)

「

十月十二日

」

大岡忠相公塋域復興計画趣意書

(※本文・発起人は資料6と同内容のため中略)

募集事項

本事業ノ実行ニ就テハ実行委員ニ一任セラレタシ、醸金ハ五円以上トシ、払込ハ東京市麴町区八重洲町八重洲ビルデング三階岸清一事務所内大岡越前守廟宇復興会(振替口座東京二八一九七番)へ払込マレタシ

大岡越前守塋域廟宇復興紀念碑

浄見寺ハ大岡家の菩提所にして、累代の墓所亦此処にあり、大正十二年の大震災の爲め本堂並に墓所大壊せしも、関係者微力にして復興する事能はず、住職菱科顕順師深く之を慨し、阪谷芳郎・横田秀雄・富谷銚太郎・牧野菊之助・小山松吉・岸清一・高木益太郎・渋沢栄一・伊東長次郎・小泉又次郎・岡崎久次郎等諸氏と謀り、朝野の名士数十人及帝都消防組の援助を得、昭和四年十月起工、翌五年三月竣功大岡忠相公の伝記ハ未だ纏りたるものなかりしか、更に沼田頼輔氏に嘱して之を編纂せしめ、広く之を配布したり
大正元年十一月従四位を贈らる、甘藷栽培の功によりて
五百字以内に御纏めを乞ふ

昭和初期における大岡忠相顕彰運動の展開

贈従四位大岡越前守忠相公墓^{菩提寺}及墳墓及浄見寺復興記念碑

大岡忠相越前守

延宝元年正月二十三日生

宝曆^{元年}十九年十二月十九日卒

享年七十五

興^(雲)誉崇義松運院

大正元年十一月十九日贈従四位

- | | |
|----------------|--------------|
| 1. 駅長中島熊吉 | 5. 岸清一 |
| 2. 横浜貿易新報社長萩原輝 | 6. 貴族院議員横田秀雄 |
| 3. 前衆議院議員山宮藤吉 | 7. 同 富谷銚太郎 |
| 4. 浄見寺住職菱科顕順 | 8. 子爵渋沢栄一 |
| | 9. 男爵阪谷芳郎 |

資料13 昭和4年10月18日「〔書簡〕(大岡越前守復興記念碑原稿)」

(資料ID [2201800213](#))

(封筒表) 「牛込区原町」^(後筆) 「小石川原町」

男 爵 阪 谷 芳 郎 殿

(封筒裏)

〆

東大久保四一二
山 宮 藤 吉

拝啓

大岡越前守復興記念碑原稿早速御送り下され、難有御礼申上候、仰に従ひ各実行委員諸君の御意見伺ふべく書面差出置候間、此段御通知申上候、頓首

十月十八日

山 宮 藤 吉

阪 谷 男 爵 閣 下

資料14 昭和5年1月9日「〔書簡〕（復興事業起工式挙行につき案内）」
(資料ID2201800214)

(封筒表)
「 東京市小石川区原町
 阪 谷 芳 郎 殿
 (後筆)
 「五年一月十二日正午起工式 欠」 」

(封筒裏)
「 相州茅ヶ崎在
 一月九日 浄見寺
 復興会 」

謹啓、酷寒の砌

益御清栄の由大慶此の事に御座候、扱て復興事業も御蔭を以て日増に進捗いたし、
 誠に有難存し候、就てハ来る十二日正午を期し、昨今の世相に準し心のみの起工式
 挙行仕り候間、御遠路甚恐縮に候へ共、万障御繰合せ御貴臨の栄を仰き度御案内申
 上候 敬具

一月九日 山 宮 藤 吉
 広 瀬 善 治
 菱 科 頭 順

(ママ)
子 爵殿

資料15 昭和5年1月10日「〔書簡〕（大岡公碑文ならびに起工式日程につき）」
(資料ID2201800215)

(封筒表)
「 東京小石川区原町
 男 爵 阪 谷 芳 郎 殿 」

(封筒裏)
「 相州茅ヶ崎町
 山 宮 藤 吉 」

昭和初期における大岡忠相顕彰運動の展開

拝啓

其後は御無沙汰に打過候処、予而御高配を煩し候大岡公碑文、牧野大審院長御願致
漸く脱稿、聊修正相成候、且又工事の件ハ昨年中準備致、愈来十一^(二)日起工式挙行の
運と相成候、其内参上委細可申上候得とも、不取敢書中を以て御報告申上候、頓首

一月十日

山 宮 藤 吉
菱 科 顕 順

阪 谷 男 爵殿

資料16 昭和5年1月14日「〔書簡〕（起工式無事執行につき）」

(資料ID [2201800216](#))

(封筒表)

「 東京市小石川区原町

阪 谷 ^男子~~子~~ 爵 殿

(後筆)

「起工式終了報告」

(封筒裏)

「

相州高座郡

茅ヶ崎在

一月十四日

大岡家菩提所」

拝復 一昨日は御蔭様にて無事起工式挙行いたし、昨日より工事に着手いたし候間、
御案心下^(安)され度候、当日天候如何かと案せしか序々快晴いたし、雨道路泥濘に候へ
しか、大岡子爵殿及岸博士殿御参例下^(列)され、難有一同満足終式いたし候、御案意下^(安)
され度候、先ハ概況御報せ如斯御座候 敬具

一月十四日

山 宮 藤 吉
広 瀬 善 治
菱 科 顕 順

(ママ)

子 爵殿

昭和初期における大岡忠相顕彰運動の展開

復興の件漸く進行、去四月二十日上棟式執行致候、就而ハ発起人署名者諸君の中未定の分に対し別紙の通依頼状差出置候間、御承知置下され度、此段御報告申上候、頓首

五月三日

菱 科 顕 順
山 宮 藤 吉

男爵阪 谷 芳 郎殿

拝啓、先以御安祥奉賀候、陳者予而御高配を煩し候大岡越前守復興の件、其後着々進行、去四月二十日上棟式執行の処、未だ寄附金予定額に達せず、甚申兼候得共、来六月三十日限応分の寄附金被成下度、此段重而御願申上候、頓首

^五月三日

実行委員

阪 谷 芳 郎
横 田 秀 雄
岸 清 一
富 谷 銈 太 郎
山 宮 藤 吉
菱 科 顕 順

何 某殿

復興会趣意書並振替貯金用紙、岸氏へ払込の事、添付

未定の分十一人

寄付金総計一万八千六百九十八円 昭和五年四月三十日現在

資料19 昭和5年10月18日「[書簡] (大岡越前守忠相碑の除幕式に際し、歌舞伎座にて興行の「大岡越前守ト天一坊」の所作について市川左団次より説明されるよう希望す)」(資料ID[2201800219](#))

(封筒表)

「 東京市小石川区原町

男 爵 阪 谷 芳 郎 殿

大 至 急

」

(封筒裏)

「昭和五年十月十八日

横浜市中区住民
在野法曹

」

明十九日ニ於ケル大岡越前守忠相明判官ノ除幕式ニ際シ、関係厚キ貴下ニ謹書ヲ呈シ候

十月興行トシテ歌舞伎座ニ於テ「大岡越前守ト天一坊」ト題スル演劇ノ筋書ト所作トヲ觀ルニ、俳優市川左団次丈ハ役者トシテ身ヲ大岡越前守ニ扮シ、以下ノ如キ所作ヲ為シ居リ候

- 一、劇中ノ越前守ハ取調ノ末天一坊ヲ徳川吉宗ノ落胤ト確信シ乍ラ、松平伊豆守ガ徳川天下ノ為メト云フ越前守ニ対シテノ指示ヲ容レ、法ヲ枉ケテ正者ト信シ居ル天一坊ヲ不正者トシテ処断セシ所作
- 二、右所断ノ証拠材料トシテ紀州平沢村庄屋甚兵衛ヲ拉シ来リテ、天下ノ為メト称シ両手ヲ突イテ頼ミ、天一坊ヲ甚兵衛ノ子ト偽証セヨト依頼シ、驚イテ逃ケントスルヲ押ヘ甘言威語ヲ用ヒテ承伏セシメ、偽証ヲ実行セシメタル所作
- 三、尚天一坊及ヒ其附キ人ノ隙ニ乗シ、落胤ノ証拠品タル墨附ト短刀ノ二品ヲ工ミニ彼等ヨリ取納ムル所作

今回ノ興行劇ハ伝来ノ大岡劇ト趣意ニ於テ大差アリ、随ツテ歴史ニ粗ナル拙者ハ孰レガ真歟偽歟判定シ能ハザレトモ、若シ今回ノ興行劇ガ真実ナルモノトセバ、歴史上ノ大岡越前守ハ果シテ明判官ナリヤ智者ナリヤ、加之将来歴史教育上、司法上、社会上ニ及ボス影響如何、天下分ケ目ノ裁断ニ付情実ヲ用ヒラレシ依リ見レバ、其他ノ中小案件ハ請託ニ依リ差別判断セラレンヤノ惑アリ、果シテ公明ナル判官ナリシヤ

縦令昔時ハ卑賤ナル俳優業ト謂ハレシ者ト雖モ、今日ノ社会ニ興行者タル以上ハ歴史ノ一端モ研究シ、且ツ自己ノ興行ノ社会ニ及ボス影響モ考慮セラルベキハ、明治ノ教育ヲ受ケシー人トシテ心得アル可シ、明日左団次丈ガ除幕スルニ際シ、招待サレタル拙者等ノ面前ニ於テ十分ナル説明ヲ与ヘラレ、除幕ノ役目ヲ遂行セラル、様御勧告ノ程希望致シ候

昭和初期における大岡忠相顕彰運動の展開

然ラザレバ除幕ト同時ニ頌徳碑ヲ拝シテ名奉行越前守ノ碑文ニ対シ不快ノ念ヲ起ス
者可有之ト被存候

右可然御判断悃願仕候 敬白

昭和五年十月十八日

横浜市中区住民
在 野 法 曹

男爵 阪 谷 芳 郎 殿

資料20 昭和5年10月19日「[大岡越前守廟宇瑩域復興事業竣成につき建碑除幕式挙行
案内]」(資料ID[2201800220](#))

(封筒表)

「 小石川区原町

阪 谷 芳 郎 殿

(後筆)

「昭和五年十月十九日十一時 出」

(封筒裏)

「

大岡越前守廟宇復興会

発起人総代

阪 谷 芳 郎
岸 清 一

」

次 第 書

昭和五年十月十九日午前十一時

建 碑 除 幕 式

挨 拶 小出村長 広 瀬 善 治

除 幕 市 川 左 団 次

報 告 山 宮 藤 吉

式 辞 岸 清 一

祝 辞 男 爵 阪 谷 芳 郎

入 仏 式 午前十一時半

仏前回向

挨 拶 浄見寺住職 菱 科 顕 順

同 子 爵 大 岡 忠 綱

右終テ昼食

余興 午後三時ヨリ芝居興行

大岡越前守の墓所及廟宇は東海道線茅ヶ崎駅より北一里(乗合自動車の便あり)小出村浄見寺にあり、古来勝訴の祈願を掛くるもの多かりしが、先年大震災の為全部倒壊せしにより、復興の為朝野名士及び消防組の発意により、東京俳優協会其他篤志家の援助の下に工事竣成、十月十九日落成式举行、当日市川左団次丈参列せらるゝ予定なり、其廟宇の写真並に紀念碑の拓本は^{歌舞伎座内}此所に掲げあるにより御一覽を乞ふ

拝啓予て御高配を被りたる大岡越前守廟宇瑩域復興の事業殆と竣成致候に付、十月十九日(日曜)午前十一時東海道線茅ヶ崎駅より北一里小出村浄見寺(乗合自動車の便あり)に於て建碑除幕式を兼ね入仏式別紙次第書の通り举行致すべく候間、御参列の栄を賜り度、此段御案内申上候

謹言

昭和五年十月

実行委員

男爵 阪谷芳郎

牧野菊之助

小山松吉

富谷銈太郎

横田秀雄

山田三良

岸清一

山宮藤吉

殿

追而準備の都合有之候間、即刻御出否左記に御一報下され度候

神奈川県高座郡小出村堤 浄見寺

尚当日御参列の際此状御持参被下度候

資料21 昭和5年10月19日「[大岡家菩提所浄見寺復興記念絵ハガキ]」
(資料ID [2201800221](#))

(封筒)

「 相模国茅ヶ崎在

大岡家 浄見寺復興記念
菩提所

昭和五年十月十九日

廟宇復興会」

(追筆)

「 昭和五年十月十九日(日曜)除幕式」

◎窓月山浄見寺縁起

(当)

常寺は文禄元年三月、大岡家初代の祖忠右衛門忠勝公相州高座郡堤村領地へ吾子の菩提を吊はんか為め庵を結びて浄見と号し、文禄三年六月十二日薨去、法諡大綱院殿忠誉窓月浄見大居士と称す、慶長十六年大岡家二代の祖忠右衛門忠政父祖の為め庵を改め堂宇創建して法幢の地となし、父祖の法号窓月浄見を以て直ちに寺号とす。爾来窓月山浄見と称ふ、又該寺開闢の住職は柴田勝家の次男にて性蒲柳、早く遁世し父祖の冥福を祈る、即ち深誉上人円察大和尚なり。

夫れ大岡家の祖先は大職冠鎌足十八代九条太政大臣兼実十五代関白左大臣尚経の末男にして九条善吉と言へるあり、故ありて三河国碧海郡大岡村に住し、後ち村名を以て氏となし大岡善吉と言ふ、長男忠右衛門助勝(後ち忠勝)初めて徳川清康、広忠、家康の三公に歴仕し、武勲に依り鎗一振及びひ広忠公の諱名忠の一字を賜はり、是より以後代々忠の一字を用ふ、而して忠勝を以て大岡家初代と定む。

忠勝の長男即ち二代の祖忠右衛門忠政、天正十九年五月三日家康公より相州高座郡堤村の内三百八十石、及び寛永二年十二月十二日秀忠公より同国同郡大曲村に於て二百二十石を武勲に依りて賜はる。五代の裔忠右衛門忠相公は享保年間江戸町奉行となり越前守に任せられ、治績に依り加俸、諸侯の列に班す。

宝暦元年十二月十六日(百六十五年前)薨去せらる。法諡松運院殿前越州刺史従五位下興誉仁川崇義大居士と号し宗家中興の祖とす。大正元年十一月十九日 天皇陛下より江戸町奉行の功績に依り贈従四位を賜はる。初代忠勝公より現子爵忠綱公に至るまで拾三代也。大岡家は二代忠政公の時より分家を生じ、宗家を合せて拾家あり、武州岩槻城主現子爵忠量公は其の一にして、他の八家は旧幕臣也。窓月山堂宇

の創始は二代忠政公の発願にて慶長十六年建立し、享保十五年七世単誉上人時代に改築を加へ現今に至りしが、偶往年の関東大震災に遭遇して堂宇倒潰し、公の墳塋もまた之が為め破壊す。然る所公の徳風清節を欽慕する朝野の名士相諮りて公の塋域を修築すると共に殿堂を再建し、尚ほ境内に復興記念碑を建て一層茲に美観を呈す、時昭和五年十月十九日也。

◎大岡家菩提所

大岡家の菩提所は祖先の領地たる相州茅ヶ崎在堤浄土宗浄見寺と、東京府下野方曹洞宗功運寺、外に別家の菩提所七箇寺あり、功運寺は中世より夫人方の墓所となり。浄見寺は殿方の墓所にして、開祖より中興忠相公及び歴代の当主は窓月山頭大樹のもとにエイ埋せられたまふ。

◎寺宝

忠相公御使用品

火鉢 一個 煙草盆 一個 膳具二膳

忠相公御真筆

所宝惟賢 一軸 施主堤 石井文四郎

窓月山浄見寺二十三世
菱科頭 順識



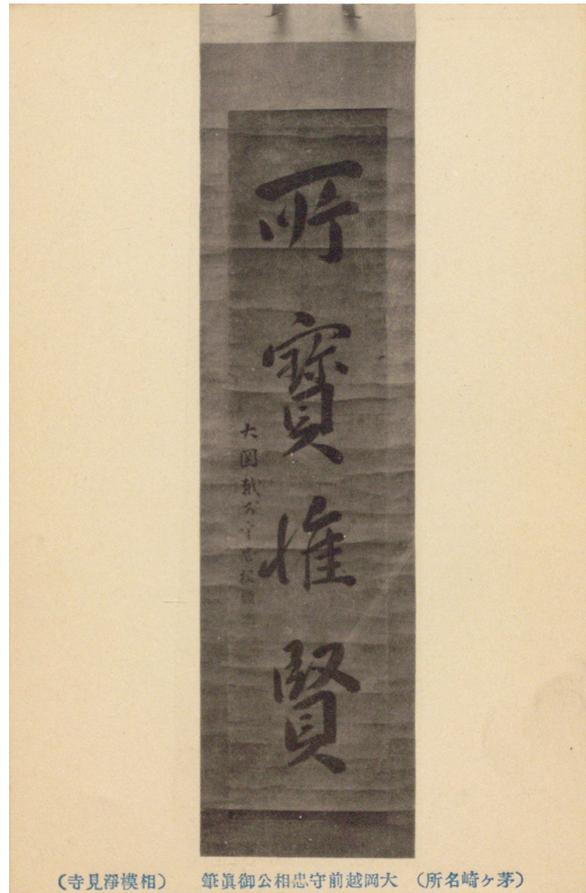
(寺見浄模相) 堂本寺見浄所提善家岡大 (所名崎ヶ茅)
(茅ヶ崎名所) 大岡家菩提所浄見寺本堂 (相模浄見寺)



(寺見淨模相) 墓公相忠守前越岡大 (所名崎ヶ茅)
 (茅ヶ崎名所) 大岡越前守忠相公墓 (相模淨見寺)



(寺見淨模相) 碑念記興復宇廟 (所名崎ヶ茅)
 (茅ヶ崎名所) 廟宇復興記念碑 (相模淨見寺)



(寺見淨模相) 筆真御公相忠守前越岡大 (所名崎ヶ茅)
 (茅ヶ崎名所) 大岡越前守忠相公御真筆 (相模淨見寺)

資料23 (昭和)1月13日「〔書簡〕(大岡越前守廟宇復興計画実行委員会開催通知)」
(資料ID2201800223)

拝啓、大岡越前守廟宇復興計画準備着々進行致候に付、実行委員会を開き諸般の御協議申上度候間、来十九日午後五時日本倶楽部に御出席、御指図被成下度、此段御通知申上候、頓首

一月十三日

横 田 秀 雄
岸 清 一
山 宮 藤 吉

男爵 阪 谷 芳 朗殿^(郎)

資料24 (昭和)「〔大岡越前守廟宇復興事業経過覚書〕」(資料ID2201800224)

(封筒表書)

「 大岡越前守墓所保存

十五年十二月十一日面会ス

山田三良ニ紹介ス

(封筒裏書)

「 入費一万八千円 堂五間半ニ六間
内墓ノ修理千円
茅ヶ崎ヨリ歩行四十分
香川駅ヨリ同 二十分

東京市小石川区
原町百二十六番地

阪 谷 芳 郎

(1)昭和二年九月一日、山宮藤吉日本クラブ来訪、発起人中ニ加名ヲ承諾ス

同九月二十六日五時、日本クラブ 阪谷、山田、岸、富谷、窪田、山宮、菱科、
吉田

委員長 岸清一

委員 阪谷、山田、富谷、高木、横田

法曹界筆、法律新聞広告ノコト

同十月一日、岸氏ト語ル 十月六日昼、原法相ト語ル

同十月二十九日、日本クラブ委員会 岸、阪谷、富谷(早退)、山宮、菱科 通知

文案ヲ岸、山宮、菱科ニ託ス

同十一月二十四日、山宮ヲ^(子爵)渋沢子ニ紹介ス

同十二月一日、日本クラブ発起人会趣意書ヲ定ム

同十二月二日、松井茂ヨリ工事ニ付伊藤忠太氏ニ相談ノコト提言アリ

同十二月十六日、越前守命日茅ヶ崎在小出村浄見寺墓所参拝、代官所跡ニテ休息、眺望可、同行松井茂、藤井某(岸氏代)、横山鉦太郎(横浜地方裁判所長)、森富太(演劇家)等諸氏

昭和三年五月一日夜、山宮・菱科来宅ニ付、余ハ怠慢ヲ責メ督励ヲ加フ、山宮ハ代議士ヲ罷メ岡崎久次郎之ニ代レル由

三年五月十一日、日本クラブ 岸、山宮、富谷、泉、阪谷、菱科、典山モ来リシ由

岸洋行ニ付委員長ヲ横田秀雄氏トスル件可決

一般勧誘状ハ一口十円以内トスルコト、講談、演劇ニモ依頼スルコト モツト
ヅンハ、進行スルコト

同六月十五日発、山宮来状、弁護士其他へ通知

同七月六日、今村力之助ニ語ル、賛成ヲ求ム

同十月十日、日本クラブ 横田秀雄(岸代)ニ催促ス

四年一月十九日、日本クラブ 横田、阪谷、山宮、菱科外一名 予算二万円ノ内
今回ニテ申込約一万三千元 三井、三菱、古河、森村、大倉、根津、大橋、服部、
^(ママ)大橋等ニ対し実行委員ノ名ニテ更ニ寄付ヲ促スコトニ決ス

二月六日山宮ヲ左記紹介(名刺ニテ)

山本久三郎、平沢真三、末延道成、岩田富造、有賀長之、大川平三郎、根津嘉郎、穂積重造、服部金太郎、青木菊雄、鈴木三郎助、御木本幸吉

六月五日「大岡越前守」二冊受取ル 山宮送付

○九月二十五日 日本クラブ 阪谷、岸、横田、富谷、山宮、菱科、広瀬 外一人
工事着手ニ決ス 家根銅葺トスルコト

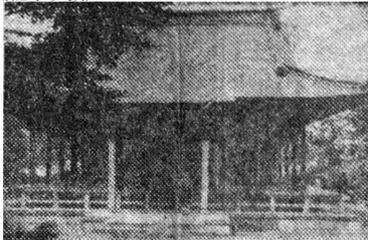
碑文ハ仮名交リヲ主張ス 穂積男ナト託ス所存

工事監督ハ広瀬善治(小出村長)ニ頼ム 余ハ村田公義ノコトモ一寸話ス

- 十月十二日、山宮来り、碑文仮名書ニテ依頼、撰者ハ大審院長ト為スコト希望
工事ハ東京ニテ注文致度由ニ付、尚下請ニ投ケシメサルヨフ注意ス、又監督ヲ小
出村村長ニ託スルニ就テモ其相談相手ニ村田公義氏ノ如キ人入用ナルヘ^(キ脱カ)旨ヲ語ル
- 十月十三日、碑文ヲ試ミニ起草シ（撰者ヲ大審院長牧野菊之助トス）、山宮氏ニ送
り実行委員八氏ノ意見ヲ求メシム（十八日付山宮ヨリ回答アリ）、十月十九日岸清一
ヨリ大岡公ノ事ヲ碑文ニ加ヘ度旨話アリ、余ハ字数不足ナラント語ル
- 五年一月十日付山宮来状 牧野大審院長撰文ヲ承諾ス云々
- ◎五年一月十二日、起工式執行 余不参
- 同四月二十日、上棟式 余不参

(2) ツ、キ

(新聞記事切抜)



大岡越前守の廟を復興

舞台の同役左団次も参列

昔から神奈川県茅ヶ崎の浄見寺に大岡越前守の廟宇はあつたが大震災のため大破してそのまゝとなつてゐたのを今度阪谷男爵、牧野大審院長、小山検事総長、富谷、横田各前大審院長、岸清一博士等越前守と縁の深い法曹界の知名の士の胆いりで復興したので十九日その落成式を挙行することとなつた丁度浜口首相の筆に成るてん額と山宮前代議士筆の記念碑も出来たので合せて除幕式を挙げることになつたが目下歌舞伎座の天一坊で越前守にふんしてゐる市川左団次が当日出かけて除幕することになつてゐる

小山検事総長は語る『大岡越前守の裁判官としての業跡^(續)はいまだ疑問の点が多いが名町奉行として江戸の消防等に尽した点は確かなので我々裁判所関係の有志が骨を折つてその廟を復興することになつたものです』【写真復興した同廟】

昭和五年十月十六日 東京朝日切抜

- 五年十月十九日(日曜)、晴天温暖風ナシ 除幕式ヲ行ヒ余祝辞ヲ述フ 公ノ徳ヲ
慶掲ス 市川左団次^(次)治除幕ノ紐ヲ引ク 余ト大岡子爵令嬢碑前ニ立ツ 来会者遠近
数千人
- 同年十二月三日、山宮藤吉、菱科顕順、吉田政司(総代)礼ニ来訪ス、写真二枚及

受納ノ银杏ノ実持参

○同六年三月二十九日付山宮来状 決算

右三月三十日付承認回答

資料25 (昭和) 「〔付箋〕(「長野県豊科町丸山熊次郎ノハガキ、右十二月二十五日岸氏ニ送付ス」)(資料ID[2201800225](#))

長野県豊科町

丸山熊治郎ノハガキ

右十二月二十五日、岸氏ニ送付ス

参考資料1 『横浜貿易新報』昭和2年12月18日(9644号、3面)

大岡公瑩域復興 阪谷男他名士一行参拝

既報の如く朝野の諸名士八十名を發起として、高座郡小出村堤なる大岡越前守忠相公累代の瑩域復興計画の議起り、

総経費二万円を以て墓所の修理・菩提寺浄見寺の建築、旧陣屋跡の公園建設、記念碑建立等の事業を為すべく計画中なるが、十六日これが視察をなすべく阪谷男爵、横山横浜地方裁判所長、東京第一弁護士会長岸清一氏、警視庁警務練習所長松井茂氏、藤井弁護士、浅草劇場主森富太氏、岡崎久次郎氏、

山宮代議士、新田茅ヶ崎町長、佐野茅ヶ崎駅長等を初め、茅ヶ崎町・小出村の有力者五十余名は午後二時茅ヶ崎駅発自動車に分乗、浄見寺に至り、広瀬小出小学校長の史実説明、住職菱科顕順氏の読経、一同の参拝焼香あり、それより当時の大岡家知行地を一周、旧陣屋跡なる高台天幕の中に

四方の美景を賞しつゝ響応あり、三時半一同自動車にて引揚げ解散したが、附近の老幼男女見物人も群集して、霜枯れの荒涼たる堤の高台に時ならぬ人出を見た

参考資料2 『横浜貿易新報』昭和3年6月17日(9824号、3面)

越前守廟宇復興会

徳川幕府三百年の法制を大成し、享寛の治をなさしめた名判官大岡忠相公の塋域は、茅ヶ崎在浄見寺にあるが、震災のため堂宇も塋域も倒壊しそのままとなつて居るので、本年は恰も公逝いて二百年にも相当する処から、中央の名士は勿論、池田知事、前代議士山宮藤吉氏その他の発企で大岡越前守廟宇復興会を組織し、経費約二万円を募集中であるが、醸金は五円以上で、東京麹町区八重洲ビルディング三階岸清一事務所内同会へ払込む事となつて居る

参考資料 3 『横浜貿易新報』昭和4年7月23日(10223号、3面)

大岡越前守の廟宇復興に 浪曲寄附興行

徳川時代の名判官大岡越前守忠相の廟宇は茅ヶ崎在小出村浄見寺に在るが、大震災で倒潰したので、土地の有志山宮藤吉氏が主唱となり、阪谷男、横田秀雄、牧野菊之助、岸清一、小泉又次郎氏等名士の賛成を得て廟宇復興会を起してゐるが、大岡越前守は江戸火消『いろは組』の創建者であるに、今度各区の消防組が後援し、東京浪花節協会副会長向山庄太郎氏斡旋の下に、八月一日より四日間東京本郷座に於て大岡政談に因んだ浪曲大会を開催し、其の収益を挙げて該復興会に寄附することとなつた

参考資料 4 『横浜貿易新報』昭和4年9月1日(10263号、3面)

越前守廟所の復興

大岡越前守廟所茅ヶ崎在小出村堤浄見寺本堂復興、廟所整理、記念碑建立に対し、朝野名士は二万円の寄附募集中であるが、既に一万七千円を越えたので、今一息にて予定額に達せんとして居る、九月これが復興工事に着手すと

参考資料 5 『横浜貿易新報』昭和5年10月15日(10662号、3面)

名判官大岡越前 建碑除幕式 名優左団次が除幕し首相の篆額で

天一坊の裁きで昔から人々に膾炙され、大衆文学や映画の流行と共に益々有名になつて来た名奉行大岡越前守の墓所及廟宇は、本県茅ヶ崎駅から北へ一里程這入つた小出村浄見寺にあるが、震災のために潰滅されたので、阪谷男爵、岸清一博士、山宮前代議士等が肝入りとなり、復興のために各方面から浄財を募り再建を急いだ結果、此の程漸く工事が竣成した

来る十九日午前十一時から朝野の名士約五百名を招き、盛大なる建碑除幕式並に入仏式を行ふ、当日は目下歌舞伎座に於て大岡政談で主役に扮して熱演してゐる市川左団次が列席、除幕をする

記念碑の高さは一丈二尺、幅三尺五寸で、撰文は本県出身紋章学の大家、文学博士沼田頼輔氏で、山宮元代議士が書いたものである

尚、浜口首相は同寺に篆額を納めることになつてゐる

参考資料6 『横浜貿易新報』昭和5年10月17日(10669号、5面)

大岡公廟宇復興祭 十九日午前十一時

名判官大岡越前守廟宇瑩域復興建碑除幕式並びに入仏式は、既報の如く十九日小出村浄見寺に於て執行されるが、当日の次第左の如し

午前十一時建碑除幕式、挨拶(小出村長広瀬善治)、除幕(市川左団次)、報告(山宮藤吉)、式辞(岸清一)、祝辞(男爵阪谷芳郎)、午前十一時半入仏式、仏前回向、挨拶浄見寺住職菱科顕順、同子爵大岡忠綱、右終つて昼食、午後三時より芝居興行

参考資料7 『横浜貿易新報』昭和5年10月20日(10672号、3面)

盛大に行はれた大岡公碑除幕式 浄見寺入仏式も挙行

贈従四位大岡忠相公廟宇瑩域復興祭並に浄見寺本堂入仏式は、十九日午前十一時より予定のごとく挙行された、大震災に

倒潰せる同寺は、朝野名士及消防組の発意に依り、東京俳優協会其他篤志の援助の下に寄附金一万八千円を以て大略其工事を終り、小春日和のきのふこれが祭典を見るに

昭和初期における大岡忠相顕彰運動の展開

至つたのであつた、^(阪)坂谷男爵、大岡子爵一族を始め朝野多数の名士、小出村を始め茅ヶ崎其他附近町村の参拝者を以て浄見寺境内は立錫の余地なき賑ひを呈した、定刻建碑除幕式あり、広瀬小出村長の挨拶、山宮前代議士の報告、岸清一氏の式辞、阪谷男爵並びに岡崎代議士の祝辞ありて、市川左団次丈、阪谷男、大岡子令嬢によりて記念碑は除幕され、住職菱科顕順師に依り洒水の儀あり、東京市消防各番の組頭、副組頭、筒先等数十名の碑前に於ける^(木)気遣節演奏あり、式を終つた

碑は表面復興記念碑にて、司法大臣従三位勲二等子爵渡辺千冬篆額、大審院長判事従三位勲二等牧野菊之助撰、裏面は公の
頌徳碑をなし、内閣総理大臣正三位勲一等浜口雄幸篆額、従七位文学博士沼田頼輔撰、共に書は前代議士勲四等山宮藤吉氏のなせるもの、今後永久同寺の至宝たり
式後一同は公の廟に参拝し、続いて本堂入仏式に移り、菱科師先導、附近各寺院数十名の僧侶に依りて仏前回向あり、菱科師並に大岡忠綱子の挨拶ありて午後一時式を閉ぢた、午後三時よりは
余興に移り、境内に建られたる仮設舞台に於て村芝居が興行せられ、夜遅くまで賑ひ小出村未曾有の盛況を呈した（写真は除幕されたる記念碑、羽織袴姿は左団次丈、洋服姿は阪谷男、其前は大岡子令嬢）